

「五輪書」(宮本武蔵)
上巻(地の巻・水の巻)

まえがき

さて、今回は、有名な『五輪書』（宮本武蔵）の考察であるが、それは、子供の頃から、映画やテレビドラマなどで、実に数多く観てきた「劍豪・宮本武蔵」の実像を知るための作業であり、そのためには、どうしても「彼」（宮本武蔵）が自ら実際に書き記したものを基にして、弟子が完成させた『五輪書』（つまり「地下水火風空之五巻」）をできるだけ丁寧かつ厳密に読み解く以外、いかなる道も残されていないのである。

とは言え、「兵法」（劍術）に関しては、まさに素人である自分にとつて、かなりの分量の、いわゆる『五輪書』をどのように読み解けばよいのか難しい問題ではあるが、しかし、結局は、一人一人、誰でも「自分なりに読み解く」ほかはなく、「兵法」（劍術）に關する専門的な「知識や技術」などは、何年も何十年も真劍に取り組んで、まさに「兵法」（劍術）というものを身を以って「体得している人たち」に任せるしかなく、それゆえ、ここでは、むしろ宮本武蔵の「心の中」をその数多くとある「項目」の原文などにできるだけ寄り添いながら、自分なりに「読み解いたもの」を書き記したものである。

例えば、宮本武蔵は、なぜ、自分の「劍法」を「二天一流」と号したのか？ また、二天一流の心は、水を本とするとは、一体、どういう意味なのか？ また、宮本武蔵の有名な「目付」とは、一体、どういうものになるのか？ また、宮本武蔵が考える「武士の定義」とは、一体、どういうものなのか？ また、心の持ち様の「平常心」とは、太刀の「持ち方」とは、「五つの構え」とは、「無念無相」の打とは、そして、宮本武蔵が到達した武芸の最究極的な「境地」とは、また、極めて難解とされる「岩尾の身」とは、「万理一空」とは、さらに、「古木鳴鶴図」や「宮本武蔵の自画像」、その他、それらすべての「謎」は解かれていますので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見て下さい。

ちなみに、「原文」のテキストは、岩波書店出版の岩波文庫『五輪書』（渡辺一郎校注）からの「引用」となっております。

平成二十九年七月吉日（改訂版）

如月翔悟

目次

まえがき

① 地之巻（地の巻）

序、序文

- 一、夫兵法といふ事、……
- 一、兵法の道といふ事
- 一、兵法の道、大工にたとへたる事
- 一、兵法の道
- 一、此兵法の書、五巻に仕立つる事
- 一、此一流、二刀と名付くる事
- 一、兵法二つの字の利を知る事
- 一、兵法に武器の利を知るといふ事
- 一、兵法の拍子の事
- 一、心得「九項目」

あとがき

※ 参考文献

目次

まえがき

② 水之巻（水の巻）

- 一、兵法心持の事
- 一、兵法の身なりの事
- 一、兵法の目付といふ事
- 一、太刀の持ちやうの事
- 一、足づかひの事
- 一、五方の構の事
- 一、太刀の道といふ事
- 一、五つのおもての次第、第一の事（中段）
- 一、おもての第二の次第の事（上段）
- 一、おもて第三の次第の事（下段）
- 一、おもて第四の次第の事（左脇）
- 一、おもて第五の次第の事（右脇）
- 一、有構無構のおしへの事
- 一、敵を打つに、一拍子の打の事
- 一、二のこしの拍子の事
- 一、無念無相の打といふ事
- 一、流水の打といふ事
- 一、縁のあたりといふ事
- 一、石火のあたりといふ事
- 一、紅葉の打といふ事
- 一、太刀にかはる身といふ事
- 一、打つとあたるといふ事
- 一、秋猴の身といふ事
- 一、漆膠の身といふ事
- 一、たけくらべといふ事
- 一、ねばりをかるといふ事
- 一、身のあたりといふ事
- 一、三つのうけの事
- 一、おもてをさすといふ事
- 一、心をさすといふ事
- 一、喝咄といふ事
- 一、はりうけといふ事
- 一、多敵のくらしいの事
- 一、打あいの利の事

- 一、一つの打うちといふ事
- 一、直通じきつうのくらいといふ事
- 一、「水の巻すいまく」の後記

あとがき

※ 参考文献

「五輪書」(宮本武蔵)
第一部(地の巻)

例えば、宮本武蔵の『五輪書』というのは、世界的にも非常に有名な「本」であり、それゆえ、幾つかの「外国語」にも翻訳されて、実に数多くの人たちによって読まれているかと思うが、しかし、その真の「意味内容」が正しく読まれているかどうかは、また、別の問題になって来るのだろう。——それはともかく、まず、彼自身は、いわゆる「自分の半生」を振り返って、次のように語っている。

つまり、「……我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。其あいて、新当流有馬喜兵衛といふ兵法者に打勝ち、十六歳にして但馬国秋山といふ強力な兵法者に打勝ち。廿一歳にして都へ上り、天下の兵法者にあひ、数度の勝負をけつすといへども、勝利を得ざるといふ事なし。其後国々所々に至り、諸流の兵法者に行合ひ、六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也……」とある。

これは、まさに『事実』（つまり「彼の記憶」）をそのまま書き写したということだと思ふが、彼は、子供の頃から、すでに「兵法の道」に心をかけて、そして、十三歳の時に、初めて、「立ち会った」ということである。その後、「……廿一歳にして都へ上り、天下の兵法者にあひ、数度の勝負をけつす」というのは、まさに「吉岡一門」との壮絶な戦いのことになるかと思う。そして、有名な佐々木小次郎との「巖流島の決闘」というのは、彼が二十九歳の時とすれば、それまでにすでに「六十余程迄」、まさに「真剣勝負」を行なっていて、しかも「一度も負けたことがなかった」と記してある。それでは、なぜ、自分は、一度も負けなかったのか？ それについては、次のように語っている。

つまり、「……我、三十を越へて跡をおもひみるに、兵法至極して勝つにはあらず。をのづから道の器用有りて、天理を離れざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや」とある。つまり、「兵法至極して勝つ」とは、すなわち、「兵法を極めていたから勝つた」のではなく、それは、「をのづから道の器用あり」て、つまり、「道の器用」とは、「剣術の器用」であり、それは、太刀（刀）を巧みに使いこなす実践（体得）の器用であつて、「兵法」（知識）などをいくら極めたところで、実際に人を斬ることはできないのである。それは、自然と「天理」（つまり「自然の道理」）に適った「刀の使い方」や「身の動き」などをしてきたからか？ それとも、「他流の兵法、不足なる所にや」、つまり、戦つた相手の兵法（剣術）が、たまたま「力不足」（弱かった）からなのか？ もちろん、そういうことではないのだ、と、むしろ、はっきりと言いたいくらいだったに違いない。

そして、「……其後なをもふかき道理を得んと、朝鍛夕錬してみれば、をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の此也。其より似来は、尋ね入るべき道なくして、光陰を送る。兵法の利にまかせて、諸芸、諸能の道となせば、万事におゐて、我に師匠なし。今此書を作るといへども、仏法、儒道の古語をもちからず、軍記・軍法の古きことをもちひず、此一流の見たて、実の心を顕はす事、天道と観世音を鏡として、十月十日の夜寅の一てん（午前四時頃）に、筆をとつて書初むるもの也……」とある。

これは、実に興味深い「文章」であり、それゆえ、順を追って考えてみたいと思ふ。まず、「……其後なをもふかき道理を得んと、朝鍛夕錬してみる」とある。これは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、宮本武蔵自身、

まだ「自分には学ぶべきものがある」と感じていたということである。それをもっと分かりやすく言えば、自分は、まだ「山の頂上」へは真に到達していないという自覚であり、それゆえ、「まだ先がある」という「思い」(感じ)である。ところが、二十年后、彼は、「……をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の此也……」とある。つまり、「兵法の道にあふ事」とは、すなわち、まさに「兵法の奥義(神髓)を体得(会得)した」ということである。これは、実に驚くべき「言葉」であり、なぜなら、例えば、「少年老い易く、学成り難し」という有名な言葉があるが、宮本武蔵自身、その「学が成った」と言っているのであり、終に「山の頂上」へと、うそ偽りなく、真に到達したと言っているのである。——例えば、学問で言えば、若い時からの凄まじいまでの「知識欲」が何十年と続いていたが、それが、突然、まさに「ばたつと止まってしまい、もう学ぶべきなものもなくなってしまう、もう学ぶべきなものもなくなってしまう」ということである。それと全く同じように、つまり、宮本武蔵自身、若い時からの凄まじいまでの「武芸の修行」を何十年と続けてきたが、それが、突然、まさに「ばたつと止まってしまい、もう学ぶべきものが何もなくなってしまった」ということである。その「絶対的証拠」となるものが、まさに「……其より似来は、尋ね入るべき道なくして、光陰を送る」という、この「言葉」になるということである。

そして、本来ならば、他人に自分の「武芸(剣術)」を教えるという道が残されているかと思うが、(もちろん、宮本武蔵自身、そういうこともそれなりに行なってきたかも知れないが)、それとともに、「……兵法の利にまかせて、諸芸、諸能の道となせば、万事におゐて、我に師匠なし」という言葉へと連なっていくのである。つまり、宮本武蔵自身は、若い時からの、まさに凄まじいまでの「武芸探究」一筋に生きてきた人であったが、五十歳の頃、まさに「兵法の奥義(神髓)を体得(会得)する」ことによって、今まで何十年と続いたその「武芸探究欲」が、まさにばたつと止まってしまい、それに代わって、一方では、他人に「武芸(剣術)」を教えるという道と、もう一方では、その何十年と続いた「武芸探究欲」(武芸全般の「諸芸、諸能」探究欲)に代わって、いわば「小芸」(つまり「連歌、茶、書画、細工(彫刻)」、その他)などを積極的に行なうという道も開けたということである。もちろん、それ以前から様々なことに「興味や関心」は持っていて、実際に「絵や書その他」なども行なってはいただろうが、しかし、宮本武蔵自身、何よりも「武芸探究」第一の人であり、それゆえ、それを何よりも「最優先」させていたので、本格的に行なうのは、恐らく、多くは「それ」以降ということになるのだろう。

さて、「……兵法の利にまかせて、諸芸、諸能の道となせば、万事におゐて、我に師匠なし」とある。これは、非常に有名な文章(言葉)であるが、その「意味合い」は、まず、「……我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。(中略)、其後国々所々に至り、諸流の兵法者に行合ひ、六十余程迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也……」とある。つまり、宮本武蔵は、もう子供の頃から兵法の道に心をかけ、そして、「火の巻」の序の中でも、「……我が兵法においては、数度(六十余度迄)の勝負(真剣勝負)に一命をかけて打合ひ、そして、「生死二つの利をわけ」(これは「何が生死を分かつ利か)を実践で学び、また、「刀の道」(それは「太刀の道筋」)をも(実践で)覚え、また、敵の打つ太刀の「強弱」をも(実践で)知り、また、刀の「刃棟の道」(それは「刃棟の使用法」)をも(実践で)わきまえ、そして、敵を打果すための鍛錬を(日々)徹底的に行なってきた」のである。そ

のように、わが兵法（武芸）の利（勝ち）にまかせて、「諸芸、諸能」（例えば「剣術をはじめ、弓、槍、長刀、その他）などを実践で習得（体得）してきたのであり、それは、誰々に師事して教わったとか何々道場で剣術を習ったというようなことではなく、すべて数多くの「実践の戦い」の中で直接わが身を以て勝利を習得（体得）して来たのであり、また、様々な「学問」や「小芸」（例えば「連歌、茶、書画、細工《彫刻》、その他」などを含めて、まさに「……万事におゐて、我に師匠なし」ということになるのである。

それは、「小倉碑文」の中にも、「……旃（剣術）に加へて、礼、楽（音楽）、射（弓術）、御（馬車を御する）、書（文学）、数（算術）の文に通ぜざる無し。況や小芸巧業をや。殆ど為して為さざる無き者か」（ほとんど何でもこなした）とある。つまり、宮本武蔵という人は、まさに「文武二道」に優れていたとともに、それに加えて、「小芸」（連歌、茶、書画、細工《彫刻》、その他）なども行なっていたということである。そして、今、書いてある「この書物」（『五輪書』）にしても、まさに如何なる「書物」（「他人の考えややり方」などには頼らず、自分の「此一流（わが兵法）の見たて」のみによって、「実の心を顕はす事」、つまり、「自分が心の底からそう思っていることを、うそ偽りなく、そのまま書き記す」ということである。「……時に寛永二十年（一六四三年）十月上旬の此、九州肥後の地岩戸山に上り、天を拝し、観音を礼し、仏前にむかひ、生国播磨の武士新免武蔵守藤原の玄信、年つもつて六十」とある。つまり、年積もつて六十歳の時であったということである。

*

*

地の巻

ち
の
ま
き

はじめに

宮本武蔵という人は、行くところまで行った人であり、それは、まさに「兵法（剣術）の神髓を真に体得（会得）した人」であり、それゆえ、その真に体得した「兵法（剣術）の神髓」を、まさに『五輪書』（つまり「地水火風空之五巻」）の中に書き顕したということである。それでは、それらの「五巻」について、順を追って考察してみたいと思う。

一、夫兵法といふ事 それはいほう

まず、最初の本文は、「……夫兵法といふ事、武家の法なり。将たるものは、とりわけ此法をおこなひ、卒たるものも、此道を知るべき事也。今世の中に、兵法の道髓にわきまへたるといふ武士なし。先づ、道を頭はして有るは、仏法として人をたすくる道、又儒道として文の道を糾し、医者といひて諸病を治する道、或は歌道者として和歌の道をおしへ、或は数寄者・弓法者、其外諸芸・諸能までも、思ひくく稽古し、心くくにすくもの也。兵法の道にはすく人まれ也。先づ、武士は文武二道といひて、二つの道を嗜む事、是道也。縦ひ此道ぶきようなりとも、武士たるものは、おのれくが分際程は、兵の法をばつとむべき事なり。大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也。死する道におゐては、武士斗にかぎらず、出家にても、女にても、百姓已下に至る迄、義理をしり、恥をおもひ、死する所を思ひきる事は、其差別なきもの也。武士の兵法をおこなふ道は、何事におゐても人にすぐるゝ所を本とし、或は一身の切合にかち、或は数人の戦に勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ。是、兵法の徳をもつてなり。又世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役にはたつまじきとおもふ心あるべし。其儀におゐては、何時にても、役にたつやうに稽古し、万事に至り、役にたつやうにおしゆる事、是兵法の実の道也」とある。（原文）

*

*

まず、言葉の問題であるが、「……夫兵法といふ事、武家の法なり」とある。この「法」というのは、いわば「当然そうすべき決まり事」であり、例えば、「武家」（武家の子）として生まれたならば、当然のことながら、兵法は、「……日々それ頭で学び、日々鍛練して体で覚える（体得すべき）もの」である。また、「将」とは、「隊を指揮する者」（つまり「武将」）であるが、将たるものは、とりわけ此法を積極的に身を以て習得をし、また、「卒」とは、「士卒」（つまり「兵卒」）であり、卒たるものも、此道を知るべき事（つまり「しつかり学んで知っておくべきこと」）である。そして、今の世の中に、兵法の道髓にわきまへたる（つまり「真に体得している」）という武士など、一人もない。まず、道として有るのは、例えば、「……仏法は、人を助ける道、儒道は、文（学芸）の道をつただし、医者、諸病を治す道、歌道者は、和歌の道を教え、また、数寄者（茶人）、弓法者、その他の『諸芸・諸能』までも、思ひ思ひに稽古し、心々に好く（好む）もの也。兵法の道には好く（好む）ものまれ也」とある。これは、一体、どういう「意味合い」を含むものかと問えば、それは、次のようなことである。

例えば、学校の勉強などでも、いやいや、或いは仕方なく勉強しているような「精神状態」では、いくら「勉強」したところで、その「勉強」は、少しも身につかないものである。何よりも大事なことは、まさに「好くこと」(つまり「好きになる」)ことであり、そして、勉強が好きになって、初めて、勉強が面白い、楽しい、そして、学ぶことの「喜び」や、また、上達することの「喜び」などを知ることになるのである。

それは、「兵法」(武芸)、その他、すべてのことにおいて同じことであり、いやいや、或いは仕方なく「学んでいる」ような「精神状態」では、いくら「学んだ」ところで、その「学んでいる」ことは、少しも身につかないものである。何よりも大事なことは、まさに「好くこと」(つまり「好きになる」)ことであり、そして、それを「学ぶこと」が好きになって、初めて、それを「学ぶこと」が面白い、楽しい、そして、学ぶことの「喜び」や、上達することの「喜び」を真に知ることになるのである。そして、そのようなことを長年積み重ねることによって、初めて、真の「上達者」となっていくのである。

*

*

さて、冒頭の「本文」(文章)には、当時の人たちの「考え方」がはっきりと見て取れるかと思うが、それは、まず、「……今世の中に、兵法の道慥にわきまへたるといふ武士なし」とある。そして、「……大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也」ともある。——つまり、今の世の中に、兵法の道を確かにわきまえる(つまり「真に体得している」)武士など、一人もない。そして、大方の武士の「心根」を推し量るに、ただ「武士は死ぬことを心得る程度のこと」しか考えていないと、宮本武蔵は、不満を語っているのである。そして、ただ「死ぬ覚悟」だけならば、出家にても、女にても、百姓已下に至る迄、義理をしり、恥をおもひ、死する所を思ひきる事に、その「差別」(違い)などないと言っている。それでは、武士とは何か、と問えば、それは、まず、「……武士は文武二道といひて、二つの道を嗜む事、是道也」とある。つまり、武士は、文武両方ともしつかり学び、それを確かに身につけることこそ、何より大事なことであり、たとえ「不器用」(苦手)だとしても、自分の「分際程」(つまり「自分の身分位程度」)は、武士たるものは、しつかりと身につける努力はすべきである。そして、武士は、何事においても、人よりすぐれ(勝つて)いることを本(根本)として、「……時には一身の切合にかち、時には数人の戦に勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ」こと。そういうことができ得るのも、まさに「兵法を心得ている」からであり、それが、まさに兵法の「徳」(つまり「兵法がもたらす恩恵」)でもあるのである。

そして、もう一つは、「……世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役にはたつまじきとおもふ心あるべし」とある。これは、例えば、「……学校の勉強などいくら学んだところで、現実の社会(世の中)では何の役にも立たないじゃないか」というのに近いものがあり、それは、いわゆる「戦国乱世」のような時代であれば、誰でも、何よりも最優先させて「兵法」(武芸)を真剣に学ぼうとするものであるが、一方、天下太平の「世の中」へと推移していくなかで、「兵法の道」(つまり「武芸」など)をいくら真剣に学んでみたところで、この天下太平の「世の中」で実際にどれだけ役に立つというのだという気持ちであり、そういう気持ちから、いわゆる「兵法」(武芸)というものを真剣に学ぼうとする人たちも、次第に少なくなってしまうということである。

例えば、本文の中の「……兵法の道にはすく人まれ也」とあるが、それは、若しも「戦

国乱世」のような世の中であれば、誰でも真っ先に「兵法を好く（好む）人」（つまり真剣に学ぼうとする人）も多くなるだろうが、しかし、今のような「天下太平」の世の中では、いわゆる「兵法を好く（好む）人」（つまり本気で学ぼうとする人）などは、まれになつてしまうということである。ところが、宮本武蔵は、そうではなく、たとえ「天下太平」の世の中になつても、それは、「……何時にても、役にたつやうに稽古し、万事に至り、役にたつやうにおしゆる事、是兵法の實の道也」とある。——つまり、世の中がどのように「変化・変貌」しようとも、そういうことにはあまりとらわれず、「兵法」（武芸）というものを、真に「生かす道」はいくらでもあるのであり、そのように役に立つやうに稽古をし、また、役に立つやうに人に教えるということこそ、まさに「兵法の實の道」であると、宮本武蔵は、そう強調しているのである。

一、兵法の道といふ事

次は、「兵法の道といふ事」という項目であるが、それは、「……漢土・和朝までも、此道をおこなふ者を、兵法の達者といひ伝へたり。武士として此法を学ばずといふ事あるべからず。近代、兵法者といひて世を渡るもの、是は剣術一通の事也。常陸国鹿島・香取の社人共、明神の伝へとして流々をたて、国々を廻り、人につたゆる事、ちかき此の義也。古しへより、十能・七芸と有るうちに、利方といひて、芸にわたるといへども、利方と云出すより、剣術一通にかぎるべからず。剣術一ぺんの利までにては、剣術もしりがたし。勿論、兵の法には叶ふべからず。

世の中をみるに、諸芸をうり物にしたて、我身をうり物のやうに思ひ、諸道具につけても、うり物にこしらゆる心、花実の二つにして、花よりもみのすくなき所なり。とりわき此兵法の道に、色をかざり、花をさかせて、術とてらひ、或は一道場、或は二道場などいひて、此道をおしへ、此道を習ひて、利を得んとおもふ事、誰かいふ、『なま兵法大疵のもと』、まことなるべし」とある。（「原文」前半部分）

まず、漢土（中国）和朝（日本）までも、此道（兵法の道）を真に習得し、行なう人たちを、いわゆる「兵法の達者」（いわば「兵法の達人」と云い伝えて来た。そして、武士として、この「法」（兵法）を学ばないということはあつてはならないことである。

最近、兵法者と（自ら）称して「世を渡る」もの、それは、「剣術一通」（真の兵法者などではなく、それは剣術だけの人）である。例えば、常陸国（茨城県）の「鹿島・香取の社人共」（それは「鹿島神社や香取神社の神人たち」）が、まさに「明神」（神）からの「伝え」（いわば「直伝」）だと称して、様々な「流派」を立てて、国々（諸国）を巡つて、（例えば、塚原ト伝、その他）、人に「剣術」などを教え伝えるようになったのは、それは、まだ最近のことである。そして、昔から、「十能・七芸」と実に「様々な武芸」がある中でも、剣術は、まさに「利方」（有益・役に立つ）と言つて、（例えば、塚原ト伝のように）、まさに（剣術）の「芸」で世渡りをしているが、（ほうとうに）「利方」（有益・役に立つ）と言うのであれば、「剣術一通」（剣術だけを学び、ほかの武芸は学ばない）などと限るべきではなく、なぜなら、「剣術一ぺん」（それは「剣術一辺倒」）だけを学んで得られる「利」（利点）だけでは、（そもそも）「剣術」の何たるかも知りがたく、

ましてや真の「兵法」に叶うはずもないからである。——つまり、「剣術」だけではなく、他の「武芸」（例えば、弓、槍、馬術、長刀、その他）なども真に「習得」（身を以て学ぶ）ことよってこそ、初めて「剣術」の何たるかもはつきりと分かるようになると共に、まさに真の「兵法」（或いは「兵法者」）とも呼べるものになるのである。

* *
つまり、宮本武蔵がここで特に言いたいことは、次のようなことである。例えば、野球の「監督」であれば、それこそ野球全般に渡って、実に事細かな実に細部の所まですべて熟知していなければならず、また、大工の「統領」であれば、それこれ建築全般に渡って、実に事細かな実に細部の所まですべて熟知していなければならぬ。そして、その野球の「監督」が持ち合わせている、その「総合的専門知識や技術」と、一選手が持ち合わせている、その「部分的専門知識や技術」とでは、全く違うものであり、また、建築の「統領」が持ち合わせている、その「総合的専門知識や技術」と、一大工が持ち合わせている、その「部分的専門知識や技術」とでは、全く違うものである。そして、野球の「監督」や建築の「統領」などが持ち合わせている、その「総合的専門知識や技術」こそは、まさに真の「兵法」の「智慧」とも言えるものであり、一方、一選手や一大工が持ち合わせている、その「部分的専門知識や技術」だけでは、真の「兵法」の「智慧」などとは、とても言えないものである。だからこそ、宮本武蔵は、「剣術」だけの専門的な「知識や技術」などを持ち合わせているだけで、自ら「兵法者」などと名乗っているのは、明らかにおかしいと言っているのである。

* *
そして、世の中を見てみると、諸芸を売り物に仕立てて、我が身も売り物のように思いなして、この世の様々な「道具」などについても、（実用より）、売り物にしらえる心、まさに「花実」（花は、見た目の華やかさ、実、内実の優れていることであるが）、この「花実二つ」を見るに、「花」（見た目の華やかさ）に比べれば、「実」（内実の優れているもの）は、少ないのである。とりわけ、この「兵法の道」において、「色」を飾り、「花」（見た目の華やかさ）を咲かせ、「術」（剣術）などと尤もらしく誇ってひけらかし、例えば、一道場、二道場などと言って、「この道」（兵法の道）を教え、「この道」（兵法の道）を習っては、この道の「利」（有益・有利）を得ようと思うこと、誰か言う、「なま兵法は、大怪我の元」であると。それは、まさに「誠」（真実）のことである。

* *
さて、これは、一体、どういうことかと問えば、それは、例えば、「戦国乱世」のような世の中であれば、当然のことながら、その「兵法」（武芸）というものは、まさに「実践向けの実際に役立つ兵法（武芸）」となるものであるが、しかし、今のような「天下太平の世の中」においては、むしろ「見た目の華やかな、パフォーマンスに富んだ兵法（武芸）」の方が、むしろ「人気を得て、主流となっていく」のである。そして、その華やかな「兵法」（武芸）を以て、まさに「金儲けの手段」として最大限利用しようとするものである。それは、いつの世でも、また、どのような分野においても、同じような傾向は見取れるものであり、例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、どのような分野であれ、その「花実二つ」を見るに、「花」（見た目の華やかさ）に比べれば、「実」（内実の真に優れているもの）は、少ないのである。

次に、後半の「本文」であるが、それは、「……凡そ人の世を渡る事、士農工商とて四つの道也。一つには農の道。農人は色々の農具をまうけ、四季転変の心得いとまなくして、春秋を送る事、是農の道也。二つにはあきないの道。酒を作るものは、それぐの道具をもとめ、其善悪の利を得て、とせいをおくる。いづれもあきないの道、其身ぐのかせぎ、其利をもつて世をわたる也。是商の道。三つには士の道。武士におみては、道さまぐの兵具をこしらゑ、兵具しなぐの徳をわきまへたらんこそ、武士の道なるべけれ。兵具をもたしなまず、其具々々の利をも覚えざる事、武家は少々たしなみのあさき物か。四つには工の道。大工の道におみては、種々様々の道具をたくみこしらへ、其具々々を能くつかい覚え、すみがねをもつてそのさしづをたゞし、いとまもなくそのわざをして世を渡る。是士農工商、四つの道也。兵法を大工の道にたとへていひあらはず也。大工にたとゆる事、家といふ事につけての義也。公家・武家・四家、其家のやぶれ、家のつゞくといふ事、其流・其風・其家などといへば、家といふより、大工の道にたとへたり。大工は大きにたくむと書くなれば、兵法の道、大きなるたくみによつて、大工にいひなぞらへて書頭はず也。兵の法をまなばんとおもはゞ、此書を思案して、師は針、弟子は糸となつて、たへず稽古有るべき事也」とある。(「原文」後半部分)

まず、宮本武蔵は、世の中の「全体を見る眼」として、いわゆる「士農工商」という社会制度を取り上げて、その「士農工商」の「特徴や様子」などについて語っている部分であるが、その「内容」というのは、次のようなものである。

およそ、「人の世を渡る」(つまり生きていく上)に、まさに「士農工商」として「四つの道」がある。その一つは、「農の道」であり、農人(農民)は、色々な「農具」を設ける(準備・用意)して、まさに「四季転変」(四季折々の様々な気候気温の変化)などに柔軟に対応して行く「心得」に「いとま」(ひま)などなく、そのようにして「春秋」(春夏秋冬の一年)を忙しく送ることになるのが、まさに「農の道」である。

二つには、「商いの道」がある。それは、例えば、酒を作る人は、(その酒造りにより適した)それぞれの「道具」を求めて、(よりよき酒を造り)、そして、その(商品)の「善悪」の「利」(例えば、品が良いという「利」《有利》を以て、その「利」《利益》を上げること)を得て、渡世(世の中)を渡るのである。つまり、どのような「商いの道」でも、商人それぞれの「稼ぎ」というのは、まさにその「利」(有利の「利」と利益の「利」とを得て、まさに世の中を渡るのである。これが「商の道」(つまり「商いの道」)である。

三つには、「士の道」がある。武士においては、「道さまぐの兵具」(つまり「用途に応じた様々な兵具」)などを作り出し、そして、その「それぞれの兵具」が持つ「徳」(長所・短所)などをよくわかまえることこそ、武士の道であるべきである。が、その「兵具」を「たしなむ」(「好んでなれ親しもう」ともせず、それゆえ、その一つ一つの武器の「利」(利点・欠点)などもよく知らないような状態であるが、武家は、兵具を「たしなむ」(「好んでなれ親しもう」という気持ちだが、少し「浅い」(足りない)のではないか。

四つには、「工の道」がある。例えば、大工の道において、種々様々の「道具」を巧みに作り出し、そのそれぞれの「道具」を上手く使いこなしては、いわゆる「すみがね」(「規矩術」など)を以て、その「さしづ」(設計図)の内容などを糺し、休むひまなく、その「業」

(仕事)をこなして、世を渡るのである。これが「士農工商」、四つの道である。

さて、「兵法」を「大工の道」にたとえて表してみたが、大工にたとえたのは、家といふことに関連させてのことである。例えば、公家・武家・四家、その家の「やぶれ」(お家断絶)とか、家の「つゞく」(お家存続)とか、また、何々流・何々家などと、いろいろな言い方があるので、ここでは、「家」ということから、まさに「大工の道」にたとえてみたのである。大工という文字は、まさに「大きに工む」となるので、「大きなたくみ」という「意味合い」で、大工にいいなぞらえて書き顕すのである。そして、「兵法」(「兵法・武芸」)などを本気で学ぼうと思うならば、この書をよく読み、よく思索し、「……師は針、弟子は糸となつて、たへず稽古有るべき事也」とある。

*

*

さて、最後の「……師は針、弟子は糸となつて、たへず稽古有るべき事也」というのは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。まず、「針」というのは、最初、(まるで見本を示すように)、必ず、「生地」の上(下)をなめらかに縫い進んで行くものである。一方、「糸」というのは、その縫い進んでいく「針」の後を、まるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じように縫い進んで行くことになる。——つまり、若しも「針」が「師」であるならば、「糸」の弟子というのは、その「師」の後(やり方)をまるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じように、全く同じように後を追っていく。そのように絶えず稽古あるべきということである。例えば、外国語の勉強をする時には、必ず、生徒は先生の後(やり方)をまるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じようにして後を追っていくものである。それは、ありとあらゆるスポーツの「基礎」を学ぶような時をはじめ、音楽の「楽器」などを習い始めるような時にも、また、料理や大工の見習い、様々な芸事の学習、冠婚葬祭などの礼儀作法、或いは、各分野の仕事の仕方、そして、車の運転、その他、最初は、すべてそのようにして学習していくものである。

一、兵法の道、大工にたとへたる事

次は、「兵法の道、大工にたとへたる事」という項目であるが、それは、次のようなものである。「……大將は大工の統領として、天下のかねをわきまへ、其国のかねを糺し、其家のかねを知る事、統領の道也。大工の統領は堂塔伽藍のすみがねを覚え、宮殿楼閣のさしづを知り、人々をつかひ、家々を取立つる事、大工の統領も武家の統領も同じ事也。家を立つるに木くばりをする事、直にして節もなく、見つきのよきをおもての柱とし、少しふしありても、直につよきをうらの柱とし、たとい少しよはくとも、ふしなき木のみざまよきをば、敷居・鴨居・戸障子と、それぐにつかひ、ふしありとも、ゆがみたりとも、つよき木をば、其家のつよみくを見わけて、よく吟味してつかふにおみては、其家久敷くづれがたし。又材木のうちにしても、ふしおほく、ゆがみてよわきをば、あししろともなし、後には薪ともなすべき也。

統領におゐて大工をつかふ事、其上中下を知り、或はとこまはり、或は戸障子、或は敷居・鴨居・天井已下、それごとくにつかひて、あしきにはねだをはらせ、猶悪しきにはくさびをけづらせ、人をみわけてつかへば、其はか行きて、手際よきもの也。果敢の行き、手ぎわよきといふ所、物毎をゆるさざる事、たいゆう知る事、気の上中下を知る事、いさみを付くるといふ事、むたいを知るといふ事、かやうの事ども、統領の心持に有る事也。兵法の利かくなごとし」とある。（「原文」）

*

*

まず、「大将」（武将）は、例えれば、大工の「統領」として、天下の「かね」（規矩・規範）をわきまへ（心得）て、その国の「かね」（規矩・規範）をたす。これは、「正しい尺度（規範）を以て誤った尺度」を糺すということであり、また、その家の「かね」を知る事。これも「家の正しい寸法（規範）」を知るということであり、これが、まさに「統領の道」である。そして、大工の「統領」というのは、堂塔伽藍の「すみがね」（正しい「尺度や規矩術」など）を覚え、また、宮殿楼閣の「さしづ」（設計図）の内容をよく理解し、人々を使つて、家々を建てること、大工の統領も武家の統領も同じことである。

さて、家を立てるには、いわゆる「木くばり」（それは「どの木材をどこに用いるか」）を決めていく。——例えば、真つ直ぐで、節もなく、見栄えの良いものは、まさに「表の柱」として用いるのである。また、少し節があつても、真つ直ぐで丈夫な木材は、いわゆる「裏の柱」として用いるのである。また、たとえ少し丈夫でなくても、節のない木材で、見た目の良いものは、例えば、敷居・鴨居・戸障子と、それぞれに用いて、また、節があつても、ゆがんでいても、丈夫な木材であれば、その家の丈夫丈夫が要求される所を見分け、よく吟味して、そこに丈夫な木材を用いれば、その家は、久しく崩れないものとなるのである。また、様々な木材のなかでも、節が多くて、ゆがんで丈夫でもない木材は、例えば、「足しろ」（足場）として用い、そのあとは、薪として用いてもよいのである。

そして、（大工の）統領として、大工の「使い方」というのは、まず、それぞれの大工としての腕の「上中下」をよく見極めて、その腕の「上中下」に合わせて、ある大工には、床の間をはらせ、また、ある大工には戸障子を、また、ある大工には、敷居・鴨居・天井以下、それぞれの腕に合わせて大工を使い、そして、腕の悪い大工には「ねだ」（床下の横木）をはらせ、なお「悪い大工」には、くさびを削らせる。そのように人をよく見分けて、人を使うようにすれば、仕事は、はかがいって、手際よいものとなるのである。

それは、大工の統領であれ（武家の統領であれ）、大事なことは、まず、それぞれの大工（士卒）の能力の「上中下」をよく見極めて、その能力の「上中下」に合わせて、まさに「適材適所」で用いるようにすること。そうすれば、仕事は、果敢が行き、手ぎわ良いものになる。また、何事も手抜きを許さないこと。各人の「体用」（「心技体」の体）を知る事。また、各人の「気」（「心技体」の心）の「上中下」をよく見極める事。人々にやる気を起こさせる事。そして、無理（限度）を知り、敢えて「むたい」（無理）をさせない事。これらが大工の「統領」の心得るべきことであるが、それは、いわゆる「兵法の利（理）」も、（基本的には）これと全く同じことである。

次は、「兵法の道」という項目であるが、それは、「……士卒たるものは大工にして、手づから其道具をとき、色々のせめ道具をこしらへ、大工の箱に入れて持ち、統領云付くる所をうけ、柱・虹梁をも手斧にてけづり、とこ・たなをもかんなにてけづり、すかし物、ほり物をもして、よくかねを糺し、すみぐめんどう迄も手ぎわ能くしたつる所、大工の法也。大工のわざ、手にかけて能くしおぼへ、すみがねをよくしければ、後は統領となる物也。大工のたしなみ、よくきるゝ道具を持ち、透々にとぐ事肝要也。其道具をとつて、みづし・書棚・机卓、又はあんどん・まないた・鍋のふた迄も達者にする所、大工の専也。士卒たるもの、このごとく也。能々吟味有るべし。大工のたしなみ、ひずまざる事、とめをあはする事、かんなにて能くけづる事、すみがかざる事、後にひすかざる事、肝要なり。此道をまなばんとおもはず、書頭はす所のことぐに心を入れて、よく吟味有るべきもの也」とある。(原文)

まず、士卒(兵卒)たるものは、いわば「大工」であり、自らその道具を研ぎ、色々のせめ道具(工夫もの)をこしらえ、それらを「大工の箱」に入れて持ち、統領の言いつけるところを受けて、柱・梁などは、それを手斧にて削り、また、床・棚などは、かんなにて削り、透かしもの、堀りものなども行なつて、よく「かね」(曲尺で寸法)を糺し、隅々まで面倒な所まで手際よく仕上げるのが、まさに「大工の法」(やり方)である。

大工の「業」というのは、自らの手で実際にやってみて、それを実地でし覚えるものである。「すみがね」(「規矩術」等)を真に体得できれば、やがては「統領」となれるものである。大工の「たしなみ」(日頃から心がけること)は、よく切れる道具を持ち、透々にその道具を研ぐことが肝要(大事なこと)である。その(磨いた)道具を手にとって、例えば、取っ手、御厨子、書棚、机・卓、又は、あんどん、まな板、鍋のふた迄も上手に仕上げるのが、まさに「大工の専」(つまり「大工として最も大事なこと」)である。

士卒(兵卒)たるものも、全く同じことであり、よくよく「吟味」(熟慮)あるべきである。そして、大工の「たしなみ」(日頃から心がけること)は、例えば、一つは、「ひずまざる」(ゆがまない)こと。一つは、「とめ」(接合)をびたりと合せること。一つは、かんなにて能く(上手く)削ること。一つは、「すり(み)かかざる」(すり傷をつけない)こと。一つは、後で「ひすかざる」(そつて隙間ができない)こと。これらが「肝要」(大事)なことである。そして、「この道」(「兵法・武芸」)を本気で学ぼうと思ふならば、ここに書き顕したことに、「心を入れて」(それこれ本気になって真剣に)、まさに「よく吟味」(その真意を深く読み解く)ように努力すべきことである。

一、此兵法の書、五卷に仕立つる事

次は、「此兵法の書、五卷に仕立つる事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……五つの道をわかち、一まき／＼にして其利をしらしめんが為に、地水火風空として五卷に書頭はすなり。地の巻におゐては、兵法の道の大躰、我一流の見立、劍術一通にしては、まことの道を得がたし。大きな所よりちいさき所を知り、浅きより深きに至る。直なる道の地形を引きならすによつて、初を地の巻と名付くる也。第二、水の巻。水を本として、心を水になる也。水は方円のうつわものに随ひ、一てき

となり、さうかいとなる。水に碧潭の色あり、きよき所をもちひて、一流のことを此巻に書頭はす也。劍術一通の理、さだかに見わけ、一人の敵に自由に勝つ時は、世界の人に皆勝つ所也。人に勝つといふ心は千万の敵にも同意なり。將たるものの兵法、ちいさを大きになす事、尺のかたをもつて大仏をたつるに同じ。か様の義、こまやかに書分けがたし。一をもつて万と知る事、兵法の利也。一流の事、此水の巻に書するす也。第二、火の巻。此まきに戦ひの事を書記す也。火は大小となり、けやけき心なるによつて、合戦の事を書く也。合戦の道、一人と一人との戦ひも、万と万とのたゞかいも同じ道なり。心を大きな事になし、心をちいさくにして、よく吟味して見るべし。大きな所は見えずし、ちいさき所は見えがたし。其子細、大人数の事は即座にも通りがたし。一人の事は心一つにてかわる事はやきによつて、ちいさき所しる事得がたし。能く吟味有るべし。此火の巻の事、はやき間の事なるによつて、日々に手馴れ、常のごとくおもひ、心のかはらぬ所、兵法の肝要也。然るによつて、戦勝負の所を火の巻に書頭はす也。第四、風の巻。此巻を風の巻とする事、我一流の事にはあらず、世中の兵法、其流々の事を書載する所也。風といふにおゐては、むかしの風、今の風、その家々の風などとあれば、世間の兵法、其流々のしわざを、さだかに書頭はす、是風也。他の事をよく知らずしては、自らのわきまへ成りがたし。道々事々をおこなふに、外道といふ心あり。日々に其道を勤むるといふとも、心のそむけば、其身はよき道とおもふとも、直なる所より見れば、実の道にはあらず。実の道を極めざれば、少し心のゆがみに付けて、後には大きにゆがむもの也。吟味すべし。他の兵法、劍術ばかりと世に思ふ事、尤也。我兵法の利わざにおゐても、各別の義也。世間の兵法をしらしめんために、風の巻として、他流の事を書頭はす也。第五、空の巻。此巻空と書頭はす事、空と云出すよりしては、何をか奥といひ、何をか口といはん。道理を得ては道理をはなれ、兵法の道に、おのれと自由ありて、おのれと奇特を得、時にあひては拍子を知り、おのづから打ち、おのづからあたる。是みな空の道也。おのれと実の道に入る事を、空の巻にして書きとゞむるもの也」とある。(「原文」)

* *
さて、兵法を「五つの道」に分けて、それを「二巻一卷」にして、その「利」(理)をよく知ってもらうために、まさに「地水火風空」として五巻に書き頭わすものである。

まず、「地の巻」においては、兵法の道の大筋(概略)を、また、我一流(それは宮本武蔵の「二天一流の兵法」)の「見立て」を述べているが、例えば、「劍術」だけを行なっていたのでは、誠の「道」(真の「兵法」)というものは、真に「体得」し難いものである。他の「武芸」(例えば、弓、槍、馬術、長刀、その他)なども真に「習得」(身を以て学ぶこと)によつてこそ、——大きな所から小さな所を知り、浅いところから深いところに至る。それは、真つ直ぐで正しい(兵法の)「道」(真の「兵法」)の「地形」(地均しをして固める)という意味合いで、最初の一巻を「地の巻」と名づけるのである。

第二に、水の巻。水を本として、心は「水のようになる」ことである。水は、(自ら如何なる形をも持たず)、あらゆる「器」(状況)に依りて刻々と「形」を変えていくものである。時には、一滴となり、時には、蒼海となる。水には「碧潭の色」(それは「深く青々とした深淵の色」というものがある。その「清らかなところ」を用いて、まさに「一流のこと」(それは「二天一流の兵法・劍術」)を「此の巻」に書き頭わすものである。

また、劍術の「道理」をしつかりと真に体得して、一人の敵に自由に勝つようになれば、

世界の人にみな勝つことでもあるのである。人に勝つという心は、千人万人の敵に対しても同じことである。将（武将）たるものの「兵法」は、小さなことを大きいことに見立てることである、一尺の小さな型をもつて、大仏を建てるに同じ。（例えば、建築家は、小さな模型から、大きな建築物を建てるのである）。このようなことは、細やかに書き分けることは難しいので、一をもって万と知ること。そのようなことができるのも、まさに「兵法の利」（兵法を学んでいるから得られる利点）である。そして、「一流の事」（それは「二天一流の兵法・剣術」については、此の「水の巻」に書き記すものである）。

第三は、火の巻。此の巻に「戦いの事」を書き記すものである。というのも、火は、「大小」（時には大きくなったり、時には小さくなったり）と、あわただしく際だった「状態」になるので、合戦の事を書くのである。合戦の道は、一人と一人との戦いも、万と万との戦いも同じ道（道理）なのである。心を大きな事（合戦）になし、また、心を小さく（一対一）になして、よく「吟味」して見るべきである。それは、大きな所は見えやすく、また、小さい所は見えにくいものである。その「子細」を説明すれば、例えば、大人数の時は、その人数が多いために、様々な「行動」も「即座」（すぐさま）変化するということが出来にくい。ところが、一人の時は、相手の「心」も一つなので、その人の「思った通り」に即座に変化することが出来るので、それゆえ、事細かなところまで相手の「動き」（心）を読むということは、なかなかできないことなるのである。このことは、よく「吟味」（熟考）あるべきである。此の「火の巻」のことは、「はやき間の事」（素早い間のこと）になるので、日々に（鍛練して）手馴れ、また、常に（実践のごとく）思つて、変わるごとなく、持続した心を持ち続けることが、何よりも「兵法の肝要」（大事）なのである。然るによつて、戦い勝負のことを、此の「火の巻」に書き頭わすものである。

第四は、風の巻。此の巻を「風の巻」として書き記すことは、「我一流」（わが「二天一流の兵法・剣術」のことではない。世の中の「兵法」（その様々な「流派」のことを書き記すものである。なぜ、「風」というのかと言え、それは、例えば、昔の「風」とか、今の「風」とか、また、その家々の「風」などとあるように、世間の「兵法」（その様々な「流派」の「仕業」（剣術の仕方）を、定かに（はつきりと）書き頭わしたものが、まさに「風の巻」である。ほかの「流派」のことをよく知らないのでは、自分の「兵法（剣術）」をよく熟知することもなりたい。世の中の様々な「道々事々」を学び、行なうにも、いわゆる「外道」（それは、まさに「間違つた」正しくない「道」を学ぶということ）がある。——例えば、日々、その道を一生懸命に「勤むる」（努力をしている）と言えども、心のどこかに道に「背くような思い」があれば、その身（本人）は、よき道（正しい道）を学んでいると思つても、まさに「直なる所」（つまり「真つ直ぐで正しい道」）から見れば、実の道（真の「兵法・剣術」）ではないのである。実の道（真の「兵法・剣術」）を日々、鍛練して極めるのでなければ、たとえ最初は「少しの心のゆがみ」に過ぎなくても、後々には、まさに「大きなゆがみ」となってしまうものである。よくよく「吟味」あるべきことである。また、ほかの「流派」の人たちの「兵法」というのは、まさに「剣術」ばかりと世間の人たちが思うこと、それは、尤もなことである。しかし、一方、わが「兵法」の「利わざ」（理と業）というのは、それらとは全く別のもの（違うもの）である。そして、「世間の兵法」（その様々な「流派」）がどういうものかをよく知つてもらふために、いわば「風の巻」として、ここに「他流」のことを書き頭わすのであ

る。

第五に、空の巻。此の巻、「空」と書き頭わすこと、そもそも「空」（何も無い）と言
い出すからには、何をか「奥」と言い、何をか「口」（入口）と言うのか？ それ自体、
おかしいことになるだろう。——何よりも大事なことは、日々の「鍛練」によって、たと
えその時その時に或る「道理」を得たとしても、さらなる鍛練によつて、それらの「道理」
を離れ、また、新たな「道理」を得るといふような、そういうことを長年に渡つて、ほん
とうに真剣に積み重ねた結果として、その人が、うそ偽りなく、真に「兵法」（武芸）
というものを真に「習得・体得」し得たならば、兵法の道には、自然と（身や心に）「自
由」（自在さ）というものが身について来るとともに、自然と「兵法・武芸」の「奇特」
（それは「真に優れた技の神髄」《神技》）をも得て、その時々合つた（極めて絶妙な）
「拍子」を以て、まさに「……おのづから打ち、おのづからあたる」という状態になるの
である。これが、まさにすべての「空の道」である。そして、自然と「実の道」（真の「兵
法・剣術」）のその「神髄世界」へと入ることを、まさに「空の巻」として、ここに書き留
めるものである。

一、此一流、二刀と名付くる事

次は、「此一流、二刀と名付くる事」という項目であるが、それは、次のようなもので
ある。つまり、「……二刀と云出す所、武士は将卒ともにどきに二刀を腰に付くる役也。
昔は太刀・刀といひ、今は刀・脇指といふ。武士たるもの此両腰を持つ事、こまかに
書頭はすに及ばず。我朝におゐて、しるもしらぬも腰におぶ事、武士の道也。此二つの利
をしらしめんために、二刀一流といふなり。鑓・長刀よりしては、外の物といひて、武
道具のうち也。一流の道、初心のものにおゐて、太刀・刀両手に持ちて道を仕習ふ事、実
の所也。一命を捨つる時は、道具を残さず役にたてたきもの也。道具を役にたてず、こし
に納めて死する事、本意に有るべからず。然れども、両手に物を持つ事、左右共に自由に
は叶ひがたし。太刀を片手にてとりならはせんため也。鑓・長刀、大道具は是非に及ばず
（鑓・長刀、大道具を両手で持つのは仕方がないが）、しかし、刀・脇指におゐては、
いづれも片手にて持つ道具也。太刀を両手にて持ちて悪しき事、馬上にてあし、かけ走
る時あし。沼・ふけ・石原、さかしき（けわしい）道、人ごみにあし。左に弓・鑓を
持ち、其外いづれの道具を持ちても、みな片手にて太刀をつかふものなれば、両手にて太
刀をかまゆる事、実の道にあらず。若し片手にて打ちころしがたき時は、両手にても打
ちとむべし。手間の入る事にもあるべからず。先づ片手にて太刀をふりならはせん為
に、二刀として、太刀を片手にて振覚ゆる道也。人毎に初而とする時は、太刀おもくて振廻しが
たき物なれども、万初めてとり付くる時は、弓もひきがたし、長刀も振りがたし。いづ
れも其道具になれては、弓も力つよくなり、太刀もふりつけぬれば、道の力を得て振
よくなる也。太刀の道といふ事、はやくふるにあらず。第二水の巻にてしるべし。太刀は
ひろき所にてふり、脇差はせき所にてふる事、先づ道の本意也。此一流におゐて、長き
にても勝ち、短きにても勝つ。故によつて太刀の寸をさだめず、何にても勝つ事を得る
心、一流の道也。太刀一つ持ちたるよりも、二つ持ちてよき所、大勢を一人してたかふ
時、又とり籠りものなどの時によき事有り。かやうの儀、今委敷書頭はすに及ばず、一を

もつて方を知るべし。兵法の道おこなひ得ては、一つも見へずといふ事なし。能々吟味あるべき也」とある。（原文）

*

*

さて、宮本武蔵は、なぜ、自分の「剣法」を「二天一流」（或いは「二刀一流」と号したのか？ それには、次のようなはっきりとした理由があるからである。つまり、武士は、やがて、必ず「二刀」を腰に帯びることになるが、昔は、それを「太刀と刀」と言い、今は、「刀と脇差」と呼ぶ。そして、まさに「この二つ（二刀）の利（勝つ理）を知らしめんため、二刀一流といふなり」とある。つまり、日本の武士は、やがて、必ず、「刀と脇差」の二刀を腰につけることになる。そして、「……一命を捨つる時」は、それは、一命を賭けて「真剣勝負」をする時には、自分の持てる「道具」（武器）のすべてを残らず役に立てたいものである。せつかく持っているその「道具」（武器）を何の役にも立てず、ただ腰に納めたままで死んで行くというようなことは、（誰にとつても）本意であるはずはない。だからこそ、この「二刀の刀」を最大限に使いこなす、或いは、自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」という「剣法」（剣術）そのものになるのである。

それでは、どうやってそれを身につけるのかと問えば、それは、「……一流の道、初心のものにおゐて、太刀・刀両手に持ちて仕習ふ事、実の所也」とある。つまり、「一流の道」とは、宮本武蔵の「剣法」のことであるが、その「剣法」では、最初から、右手に「太刀」、左手に「刀」（脇差）を持って習い始めるというのは、まさにその通りであり、それは、「……刀・脇差におゐては、いづれも片手にて持つ道具也。太刀を両手にて持ちて悪しき事、馬上にてあし、かけ走る時あし。沼・ふけ（湿原）・石原、さかしき（けわしい）道、人ごみにあし。左に弓・鏑を持ち、其外いづれの道具を持ちても、みな片手にて太刀をつかふものなれば、両手にて太刀をかまゆる事、実の道にあらず。若し片手にて打ちころしがたき時は、両手にても打ちとむ（打ち留める）べし。……」とある。

つまり、両手に持つてだけの「剣術の習い」などをいくら行なつても、実践ではほとんど役には立たないということである。そこで、宮本武蔵は、「……先づ片手にて太刀をふりならはせん為、二刀として、太刀を片手にて振覚ゆる道也。人毎に初るとる時は、太刀おもくて振廻しがたき物なれども、万初めてとり付くる時は、弓もひきがたし、長刀も振りがたし。いづれも其道具／＼になれては、弓も力強くなり、太刀もふりなれば、道の力を得て振よくなる也……」とある。つまり、なぜ、両手に「二刀」を持たせるのかと言え、それは、片手だけで「刀」を振り習わせるためであり、そして、最初は、何でも重く感じられ、なかなか想うようには振り回すことはできにくい、しかし、何度も何度も鍛錬して慣れてくれば、最終的には自分の思い通りに片手だけで「刀」を自由自在に使いこなせるようになるものである。それは、右手一本だけで「刀」を自由自在に使いこなせるようになる。また、左手一本だけでも「刀」を自由自在に使いこなせるようになる。

（これは、右手を負傷した時などにも有効）、そして、両手を使って「刀と脇差」とを自由自在に使いこなせるようになる。——つまり、「二刀の刀」を最大限に使いこなす、或いは、自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」という「剣法」そのものであり、そのためには、当然のことながら、何よりも「肉体の鍛錬」なども日頃から徹底的にやり続けなければなら

らないことは、敢えて言うまでもない。

そして、宮本武蔵の「剣法」では、「……長きにても勝ち、短きにても勝つ。故によつて太刀の寸をさだめず、何にても勝つ事を得る心、一流の道也」とある。これは、極めて大事な言葉であり、——つまり、刀の「長さ」だけで「勝敗は決まる」ものではない。長くても、短くても、たとえいかなる「尺の刀」を使つてでも、常に勝とうとする自分自身の「剣術」そのものを磨き上げておくことが、何よりも大事だと言つていのである。また、太刀（刀）の道というのは、太刀（刀）をただ速く振るようなことではない。このことは、第二の「水の巻」のなかでも知ることになるだろう。そして、「……太刀はひろき所にてふり、脇差はせばき所にてふる事」は、剣術の基本で当然のことである。

また、二刀流は、「……太刀一つ持ちたるよりも、二つ持ちてよき所、大勢を一人してたゝかふ時、又とり籠りものなどの時によき事あり」とある。つまり、大勢と一人で戦う時には、むしろ二刀流の方がよい場合もあれば、また、「とり籠りもの」というのは、（屋内などの狭い場所に）立て籠つている場合であるが、その立て籠つている相手（敵）と戦うような時には、むしろ「二刀流」の方がよい場合もある。このようなことは、今、詳しく書き願わすに及ばない。一をもつて万を知るべきである。兵法の道を習得し得ては、一つとして見えないと言うことはないのである。よくよく「吟味」あるべきことである。

また、ここでは述べてはいないが、いわゆる「武器の利」（長所・短所）などもよく知つておくことが大事であり、それは、例えば、槍、長刀、弓、柔、棒、鎖鎌、その他、どのような「武術」に対しても、それらの「武器の利」（長所・短所）などをよく知つておくことは大事であると同時に、いかにどう戦えば相手に勝てるかの「剣術」（戦術）なども、しっかりと身に付けておかなければ、いざという時に、まさに「常に勝つ」というようなことは、なかなかでき難いことになるのである。

一、兵法二つの字の利を知る事

次は、「兵法二つの字の利を知る事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……此道におゐて、太刀を振得たるものを、兵法者と世に云伝へたり。武芸の道に至りて、弓を能く射れば射手といひ、鉄袍を得たるものは鉄袍うちといひ、鎧をつかひ得ては鎧つかひといひ、長刀をおぼへては長刀つかひといふ。然るにおゐては、太刀の道を覚へたるものを太刀つかひ、脇差つかひといはん事也。弓・鉄袍・鎧・長刀・皆是武家の道具なれば、いづれも兵法の道也。然れども、太刀よりして兵法といふ事、道理也。太刀の徳よりして世を納め、身を納むる事なれば、太刀は兵法のおこる所也。太刀の徳を得ては、一人して十人に勝つ事也。一人にして十人に勝つなれば、百人して千人にちかち、千人にして万人に勝つ。然るによつて、わが一流の兵法に、一人も万人もおなじ事にして、武士の法を残らず兵法といふ所也。道におゐて、儒者・仏者・数寄者・しつけ者・乱舞者、此等の事は武士の道にはなし。其道にあらざるといふとも、道を広くすれば、物事に出であふ事也。いづれも人間におゐて、我道／＼をよくみがく事肝要也」とある。（原文）

まず、此道（兵法の道）において、太刀（刀）を習得し得た者を、兵法者と世に言い伝えてゐる。武芸の道に至りて、弓を能く射れば射手といひ、鉄袍を得たるものは鉄袍うち

といひ、鑓をつかひ得ては鑓使といひ、長刀をおぼへては長刀つかひといふ。ところが、太刀の道を覚へたるものを太刀つかひ、脇差つかひとは言わない。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、いわゆる「弓、鉄砲、鑓、長刀」などは、確かに、みな武家の道具なれば、いづれも兵法の道ではあるが、しかし、それは、いわば「限定使用」（主に合戦使用）であり、ありとあらゆる場面で自由自在に使えるような武器ではないのである。一方、太刀（刀）というのは、ありとあらゆる場面で自由自在に使える武器であり、それゆえ、太刀よりして兵法といふ事、道理（尤もなこと）なのである。なぜなら、それは、「太刀」（刀）こそは、例えば、弓、鉄砲、鑓、長刀、その他、色々な「武器」のなかでも、最も有用な「武器」であり、いわば「武器の中の武器」（つまり最も機動性に優れた武器）であり、その「太刀の徳」（太刀の優れた力）をもって、世を納め、身を納むる事なれば、太刀は兵法のおこる所（根本）なのである。そして、「太刀の徳」（太刀の優れた力）を得ては、一人にして十人に勝つことができる。一人にして十人に勝つことができれば、百人にして千人に勝つこともでき、また、千人にして万人に勝つこともできる。然るによつて、「わが一流の兵法」（それは「宮本武蔵の兵法」）においては、一人も万人もおなじ事にして（つまり「宮本武蔵の兵法」は、一対一だけの兵法ではなく、万人対万人の兵法でもあるので）、それゆえ、武士の法を残らず兵法といふ所也。つまり、一対一の兵法だけであれば、太刀（刀）だけの兵法だけですむが、「宮本武蔵の兵法」というのは、万人対万人の兵法でもあるので、太刀（刀）をはじめ、弓、鑓、鉄砲、長刀、馬術、その他、それらすべてをひつくるめて、まさに「兵法」（「宮本武蔵の兵法」と呼ぶのである。つまり、宮本武蔵の言いたいことは、兵法の「主軸」は、まさに「太刀」（刀）であることは確かであるが、その他の「弓、鑓、鉄砲、長刀、馬術、その他」なども、みな武家の道具なれば、いづれも兵法の道として、それらもしっかりと学び得ておくべきことだと言っているのである。

また、道において、儒者、仏者、数寄者（茶人）、しつけ者、乱舞者、その他、これらの「道」は、確かに「武士の道」ではない。しかし、「武士の道」ではないといえども、これら様々な「道」を広く知れば、それだけ様々な「物事に出席」（つまり様々な「物事を知ること」）になるのである。そして、様々な「道」の様々な「物事を知れば知る」だけ、自分の「兵法の道」も、それだけ「豊かで奥深いもの」になるのである。だからこそ、宮本武蔵は、心得「九項目」のなかでも、様々な「諸芸にさわり、諸職の道を知る事」と強く説くのである。そして、どのような分野であれ、人間において、わが道わが道をよく磨くことこそは、何よりも「肝要」（最も「大事なこと」）であると言っているのである。

一、兵法に武器の利を知るといふ事

次は、「兵法に武器の利を知るといふ事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……武道具の利をわきまゆるに、いづれの道具にても、おりにふれ、時にしたがひ、出合ふもの也。脇差は座のせばき所、敵の身ぎわへよりて其利おほし。太刀はいづれの所にも大形出合ひて利あり。長刀は戦場にては鑓におとる心あり。鑓は先手なり、長刀は後手也。同じ位のまなびにしては、鑓は少しつよし。鑓・長刀も、事により、つまりたる所にては其利すくなし。取籠り者などにもしかるべからず。只戦場の道具

なるべし。合戦の場にしては肝要の道具也。され共、座敷にての利をおぼへ、こまやかに思ひ、実の道を忘るゝにおゐては、出合ひがたかるべし。弓は合戦の場にて、かけひきにも出合ひ、鎧わき、其外物きわぐにて、はやく取合はするものなれば、野相の合戦などにとりわきよき物也。城せめなど、又敵相二十間をこへては不足なる物也。当世におゐては、弓は申すに及ばず、諸芸花多くして実すくなし。さやうの芸能は、肝要の時、役に立ちがたし。其利多し（誤字で「少し」）。城郭の内にしては鉄袍にしく事なし。野相などにては、合戦のはじまらぬうちには、其利多し。戦はじまりては不足なるべし。弓の一つの徳は、放つ矢、人の目に見えてよし。鉄袍の玉は目に見えざる所、不足也。此義能々吟味有るべき事。馬の事、つよくこたへてくせなき事肝要也。惣而武道具につけ、馬も大形にありき、刀・脇差も大形にきれ、鎧・長刀も大かたにとをり、弓・鉄袍もつよく、そこねざるやうに有るべし。道具以下にも、かたわけてすぐ事あるべからず。あまりたる事はたらぬと同じ事也。人まねをせず共、我身に随ひ、武道具は手にあふやうにあるべし。将卒共に物にすぎ、物をきらふ事悪しし。工夫肝要也」とある。（「原文」）

さて、今度は「武器の利」を知ることであるが、それは、「……いづれの道具にても、おりにふれ、時にしたがひ、出合ふもの也」とある。つまり、いづれの道具も、その時、その状況に応じて、まさに「出合ふもの」（つまり「有効で役立つもの」）である。

例えば、「脇差」というのは、本来、「座のせばき所」、つまり、「太刀などの自由自在に使えないような）「狭い空間」の所で使うものであるが、特に「敵の身ぎわへよりて其利おほし」とある。つまり、「相手の身ぎわによりて」（それは「相手の身近かに寄った時」には、「脇差」というのは、その「利が多い」（つまり「極めて有効」）だと言っているのである。これは、数多くの「実践」から得た「生きた智慧」であり、それゆえ、道場などでは、腰の「脇差」の使い方などは、決して誰も教えてはくれないものである。

また、「太刀」（刀）は、「……いづれの所にも大形出合ひて利あり」とある。それは、「太刀」（刀）というのは、大方、いっどこでもどのように使っても必ず「利」（極めて有効なもの）であり、それゆえ、「太刀」（刀）こそは、いっどこでも自由自在に使える機動性の最も高い「武器」ではあるが、唯一、（太刀の自由自在に使えないような）「狭い空間」の所だけは、武器としての「欠点」をさらすことになる。それゆえ、その唯一の「欠点」を、まさに腰の「脇差」でおぎなうことによつてこそ、まさに「万全」となるのである。だからこそ、この「二刀の刀」を最大限に使いこなす、或いは、自由自在に使いこなして、あらゆる事態に対応でき得る、まさに勝つための「剣法」こそは、まさに宮本武蔵の「二天一流」という「剣法」（剣術）そのものになるのである。

次に、長刀は、戦場にては鎧に劣るところがあり、また、「……鎧は先手なり、長刀は後手也」とある。それは、「槍」というのは、本来、「先手」（最前）の道具であり、一方、「長刀」というのは、本来、「後手」（槍の後）の道具であり、そして、同じ位の「学び」（熟練度）同士の対戦であれば、槍と長刀では、槍の方が「少し有利」と見ているのである。また、鎧も長刀も、事（場所・状況）により、「つまりたる所」（自由自在に振り回せないような所）にては、その「利」（利点）は少ないとある。まして、「取籠り者」（部屋の中に閉じ籠っている者・籠城者）などを打つ場合は、（自由に振り回せない）鎧・長刀などは（好んで）使うべきものではない。つまり、ただ「戦場の道具」として「利」（有

効)であり、それは、「合戦の場」においてこそ、最も「肝要の道具」(最も有効な道具)となるのである。ところが、「座敷」(室内)でもうまく使いこなすことを覚え、細々とした使い方にとられ過ぎて、実の道(鎧・長刀の本来の使い方)などを忘れるようになっては、逆に、実践(合戦の時)には役に立たないことになってしまう。つまり、大事なことは、鎧には鎧の長所があり、長刀には長刀の長所がある。そのそれぞれの「長所」を生かした「使い方」をすべきであり、そして、例えば、「鎧の長所」であれば、それは、すなわち、まさに「合戦の場」でこそ、最も「有効な武器」となるのである。

また、「弓」は、合戦の場にて、その「かけひき」(軍勢の進退)にも「出合ひ」(使つて有効)であり、また、「鎧わき」(それは「遣隊の傍ら」)やその他の様々な「諸隊」の傍らで、まさに「連係(援護)攻撃」などを行なう時にも、素早く迅速に対応できるので、特に「野相の合戦」(つまり「野外の合戦」)などの時には、とりわけ「有効」なものである。一方、「城攻め」や「敵相」(敵との距離)が「二十間」(三十六間)以上を超えると、むしろ「不足」(ほとんど役に立たないもの)である。当世(今日)においては、弓は申すまでもなく、諸芸花多くして実が少ない。そのような「芸能」(武芸)は、肝要(いざという)時には、役に立ちにくく、その「利」(利点)は、少ないのである。

一方、「鉄砲」であるが、それは、「……城郭の内にしては鉄砲にしく事なし」とある。つまり、城郭の内からの「鉄砲」に勝るものは何もないと、もう無条件で「鉄砲」の「利」(有利さ)をほめ讃えているのである。また、「野相」(野外の戦い)においても、まだ「合戦のはじまらぬうち」(それは「相手との距離がある」うち)は、その「利」(有利さ)は、非常に多くある。しかし、戦はじまりては(つまり「相手との距離がなくなつてしまう」と、まさに「不足」(ほとんど役に立たなくなつて)しまうものである。

また、弓の一つの「徳」(優れている点)は、まさに「……放つ矢、人の目に見えてよし。鉄砲の玉は、目に見えざる所、不足也。(これは、目に恐怖を与えないからか)。此義能々吟味有るべき事」とある。これは、一体、どういうことを意味しているのだろうか？

例えば、「弓」と「鉄砲」とを比較対照した場合、どちらが「武器」として優れているのだろうか？ まず、弓の「矢」というのは、まさに目にはつきりと見えている。それゆえ、「……的へと向かつていく姿ははつきりと見えていて、その結果もはつきりと見えている」ことになる。従つて、その「結果」を見て、次の「矢」を射る時には、その「結果」を踏まえて、まさに「微調整」(つまり「修正」)をして、次の「矢」を射ることができ得るのであり、それだけ今度は「的に当たる確率」もそれだけ高くなつていく。

そして、もう一つは、鉄砲に比べれば、弓は、すぐにも次の矢を射ることが出来ることも、まさに「素早い行動」(それは「機動性に富んでいる」ことにもなるのである)。

一方、鉄砲の「玉」というのは、人の目にはまったく見えない。それゆえ、「……的へと向かつていく姿はまったく見えないが、しかし、その結果だけは見ることが出来る」というものである。しかも、当時の「鉄砲」(火繩銃)というものが、一体、どのくらいの「性能」を持っていたかによつて、結論は、全く違つて来るが、もし、的に当てられる確率が同じ位ならば、ふつう鉄砲の方が有利であり、また、その当時の鉄砲よりも、弓の方が的に当てる確率がより高ければ、むしろ弓の方が有利ということになるのかも知れない。むしろ、武器としての「破壊力」という点では、鉄砲の方が遙かに優れているが、しかし、弓の「矢」でも、その数が多くなればなるほど、また、その「先に毒でも塗つて」

おけば、その「致死率」を高めるといふことは、十分に可能なことになるのである。

そして、「弓」と「鉄砲」、どちらが怖いかと問われれば、それはもちろん、どちらも怖いものではあるが、それでも、やはり「鉄砲」の方が遙かに怖いと感じるのはなぜなのだろうか？ それは、まず、鉄砲の「弾丸」というものは、まさに目には全く見えないほどの速さであり、しかも、かなり遠い距離からでも狙われて発射されれば、ふつう、よけようがないものであり、しかも、その「破壊力」の大きさ、それは、死に至る確率が極めて高いからでもあり、そして、今日では、当時の「弓」やその他の「武器」などの姿は、ほとんど消えてしまい、唯一「鉄砲」だけが、まさに今日までその姿（火縄銃）を現代の「姿」（様々な銃器）へと変えて生き残っている「武器」といふことになるのである。

さて、最後は、「……馬の事、つよくこたへてくせなき事肝要也。惣而武道具につけ、馬も大形おおかたにありき、刀・脇差も大形にきれ、鎧やうり・長刀ながなたも大かたにとをり、弓・鉄砲もつよく、そこねざるやうに有るべし。道具以下にも、かたわけてすく事あるべからず。あまりたる事はたらぬと同じ事也。人まねをせず共、我身に随まひ、武道具は手にあふやうにあるべし。将卒しょうそつ共に物にすぎ、物をきらふ事悪あしし。工夫肝要也」とある。

まず、馬のことは、十分に応えて耐久力もあり癖のないのが肝要（大事）である。総じて、武道具（武器）については、馬も大形おおかた（それなりに）に歩き、刀かたな・脇差わきざしも大形（それなり）に斬れ、鎧やうり・長刀ながなたも大かた（それなり）にとをり、弓・鉄砲も丈夫で、壊れないようであるのがよい。これは、一体、どういう意味なのか？ なぜ、大形おおかた（それなり）でよいと考えるのか？ なぜ、「名馬」（より優れた馬）や「名刀」（より優れた刀）を追い求めてはいけないのか？ それは、馬は、まさに「馬の役割」（十分走れるという役割）を果たしてくれれば、それで十分であり、また、刀は、まさに「刀の役割」（十分人が切れるという役割）を果たしてくれれば、それでもう十分であり、それ以上の「走りや切れ味」などを執拗に追い求めるのは、それは、馬や刀に余りにも「固執・執着」し過ぎる（つまり「頼り過ぎていゝ」）からであり、大事なものは、馬が「名馬」（より優れた馬）であることではなく、その「馬」を自由自在に乗りこなせる「馬術」こそが大事であり、また、刀が「名刀」（より優れた刀）であることが大事なのではなく、その「刀」を自由自在に使いこなせる「兵法」（剣術）こそが、何よりも大事なことになるからである。

そして、道具以下においても、偏かたなつて好すく（好む）ことあつてはならないとある。これは、一体、どういうことなのか？ まず、武器であるが、刀だけを偏愛する、鎧やうりだけを偏愛する、弓だけを偏愛する、鉄砲だけを偏愛する、その他、そのような偏愛は、よくないので、太刀たち（刀）をはじめ、その他の「弓、鎧やうり、鉄砲、長刀ながなた、馬術、その他」なども、みな武家の道具なれば、いづれも兵法の道として、それらもしっかりと学び得ておくべきことだと言っているのである。しかし、だからといって、それらすべて同じように鍛練すべきだということではない。それは、「あまりたる事はたらぬと同じ事也」（つまり「多過ぎることは、逆に、どれも中途半端になり易い」）のである。また、他人が鉄砲を習っているから、自分も鉄砲を習おうというのではなく、大事なのは、自分にぴったりと合った「武器」を見つけ出し、そして、その「武器」が、自分の手にぴったりと合った「武道具」になるまで、徹底的に鍛練すべきことなのである。つまり、太刀たち（刀）なら太刀たち（刀）を主軸として、その他の「弓、鎧やうり、鉄砲、長刀ながなた、馬術、その他」なども、しっかりと学び得ておくべきだということである。そのことは、道具以下でもすべて同じことである。そ

して、将卒共に「物にすぎ、物をきらふ事悪しし」とある。これは、一体、どういう意味合いになるのか？ まず、今日の「軍隊」(将卒)に於いても、個人の「好き嫌い」など言えるような世界ではなく、また、個人の「好き嫌い」など言っている場合でもないのである。それに加えて、何事においても、いわゆる「好き嫌いはいくくない」ということである。つまり、「これを好み、これを嫌う」、そのような偏った「好き嫌い」だけで物事を安易に「選び、判断し、決定し、そして、言動する」ことでは、決して物事を正しく「選び、判断し、決定し、そして、言動する」ことなど、到底できないことになるからである。

一、兵法の拍子の事

次は、「兵法の拍子の事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……物毎に付け、拍子は有る物なれども、とりわけ兵法の拍子、鍛錬なくしては及びがたき所也。世の中の拍子あらはれてある事、乱舞の道、伶人管弦の拍子など、是皆よくあふ所のろくなる拍子也。武芸の道にわたつて、弓を射、鉄砲を放ち、馬にのる事迄も、拍子・調子あり。諸芸・諸能に至りても、拍子をそむく事は有るべからず。又空なる事におゐても拍子はあり。武士の身の上にして、奉公に、身をしあぐる拍子、しきぐる拍子、筈のあふ拍子、筈のちがふ拍子あり。或は商の道、分限になる拍子、分限にてもそのための拍子、道々につけて拍子の相違有る事也。物毎のさかゆる拍子、おとろふる拍子、能々分別すべし。兵法の拍子におゐて様々有る事也。先づあふ拍子をして、ちがふ拍子をおきまへ、大小・遅速の拍子の中にも、あたる拍子をしり、間の拍子をしり、背く拍子をしる事、兵法の専也。此そむく拍子おきまへ得ずしては、兵法たしかならざる事也。兵法の戦に、其敵の拍子をしり、敵のおもひよらざる拍子をもつて、空の拍子をしり、智恵の拍子より発して勝つ所也。いづれの巻にも、拍子の事を専ら書記す也。其書付の吟味をして、能々鍛錬有るべき物也」とある。(「原文」)

まず、「兵法の拍子」というのは、「……物毎に付け、拍子は有る物なれども、とりわけ兵法の拍子、鍛錬なくしては及びがたき所也」とある。つまり、何事につけても、拍子はあるものだが、とりわけ「兵法の拍子」というのは、鍛錬なくしては及びがたき所也(つまり「毎日毎日の鍛錬によつてのみ、初めて体得されるものであり、それゆえ、理屈などでどうなるものでもない」)のである。世の中にあらわれて(知られて)いる拍子には、例えば、能の舞、伶人(雅楽演奏者)管弦の拍子など、これらはみな「よくあふ所」(つまり調和する所)の「ろくなる拍子」(ゆがみ・ひずみのない正しい拍子)である。また、武芸の道においても、弓を射、鉄砲を放ち、馬に乗る事までも、拍子・調子はあるものである。諸芸・諸能においても、拍子に背くような事はあつてはならない。また、空なる事(姿形のない事柄)においても、拍子はあるものである。例えば、武士の身の上にしても、奉公(主君に仕えて)、身を上げる(出世、栄達する)拍子もあれば、し下げる(失脚、没落する)拍子もある。また、その「筈」(思惑通り)になる拍子もあれば、また、その「筈」(思惑通り)にならない拍子もある。或いは、商の道においても、分限(大金持ち)になる拍子もあれば、分限(大金持ち)になる拍子もあれば、分限(大金持ち)にても、そのたゆる(それを失う)拍子もある。つまり、それぞれの「道」において、それぞれ違う拍子がある。物事の栄える

拍子もあれば、衰える拍子もある。よくよく「分別」(わきまえる) (べきことである)。

そして、兵法の拍子においても様々あるが、「……先づあふ拍子をしつて、ちがふ拍子をわきまへ、大小・遅速の拍子の中にも、あたる拍子をしり、間の拍子をしり、背く拍子をしる事、兵法の専也。此そむく拍子わきまへ得ずしては、兵法たしかならざる事也。兵法の戦に、其敵其敵の拍子をしり、敵のおもひよらざる拍子をもつて、空の拍子をしり、智恵の拍子より発して勝つ所也」とある。——つまり、まず、合う拍子を知り、ちがう拍子をわきまえ、大小・遅速の拍子の中にも、「あたる拍子」(打つ拍子)を知り、「間の拍子」(間合いの拍子)を知り、「背く拍子」(相手の拍子を崩す拍子)を知ることが、何よりも大事なことはあるが、特に、この「背く拍子」(相手の拍子を崩す拍子)を知り得ずしては、その「兵法」(剣術)は、(決して) 確かなものだとは言えないものである。そして、実践では、その敵その敵の拍子をよく知り、敵の思いも寄らない拍子を以って、その(敵の)「空の拍子」(自分にとって思いも寄らない拍子)を知り、それに対応して、(自分は)、智恵の拍子より発して、敵に勝つことができ得るといふことである。

例えば、相手が「自分の未だ知らない拍子」を以って攻めてきた時に、相手には「こういう拍子もあるんだ」と知って、それでは、その「拍子」にどう対応したらよいかをよく考えて、まさに「相手の拍子を崩す拍子」を以って、それは、自分の「智恵の拍子」より発して、敵に勝つことができ得るといふことである。——ところで、最後の部分は、もう一つの表記があり、それは、「……敵のおもひよらざる拍子をもつて、空の拍子を智恵の拍子より発して勝つ所也」といふものであるが、それは、「……敵にとって思いも寄らない拍子を以って、その(自分の)『空の拍子』(敵にとって思いも寄らない拍子)を、わが智恵の拍子より発して、敵に勝つことができ得る」といふものである。

ちなみに、その敵その敵の拍子を知るとは、いわば敵の「呼吸」(息遣い)をはじめ、その時々「……リズム、調子、間合い、タイミング、勢い、様子、気の長短、対応の仕方、戦術、その他」の、まさに微妙なところまでも「感じ分ける」といふことである。

一、心得「九項目」

さて、最後は、「地の巻」の後記であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……右一流の兵法の道、朝な夕な、勤めおこなふによつて、おのづから広き心になつて、多分一分(意味は「合戦と一対一」両方一体)の兵法として、世に伝ふる所(世に伝わっているものを)、初而書頭はす事、地水火風空、是五卷也。我兵法を学ばんと思ふ人は、道をおこなふ法あり。(この「法」とは、朝な夕な、毎日、兵法・剣術を学び、鍛練する時の、いわば「心得」(心の有様)というものである。)

第一に、よこしまになき事をおもふ所

第二に、道の鍛錬する所

第三に、諸芸にさはる所

第四に、諸職の道を知る事

第五に、物事の損徳をわきまゆる事

第六に、諸事目利を仕覚ゆる事

第七に、目に見えぬ所をさとつてしる事

第八に、わづかなる事にも気を付くる事
第九に、役にたゝぬ事をせざる事

大形如レ此理を心にかけて、兵法の道鍛錬すべき也。此道に限りて、直なる所を広く見たてざれば、兵法の達者とは成りがたし。此法を学び得ては、一身にして二十三十の敵にもまくべき道にあらず。先づ氣に兵法をたえさず、直なる道を勤めては、手にて打勝ち、目に見る事も人にかち、又鍛錬をもつて惣躰自由なれば、身にても人にかち、又此道に馴れたる心なれば、心をもつても人に勝ち、此所に至りては、いかにとして人にまくる道あらんや。又大きなる兵法にしては、善人を持つ事にかち、人数をつかふ事にかち、身をたゞしくおこなふ道にかち、国を治むる事にかち、民をやしなふ事にかち、世の例法をおこなふにかち、いづれの道におゐても、人にまけざる所をしりて、身をたすけ、名をたすくる所、是兵法の道也。

正保二歳五月十二日

寺尾孫之丞殿

新免武蔵

さて、宮本武蔵は、我が兵法を学ばんと思う人は、次の「九項目」を心にかけて、兵法の道を朝な夕な鍛錬すべきと言っている。それは、①よこしまになき事を思ふ事。(正思・正考)②道の鍛錬する事。③諸芸にさわる事。④諸職の道を知る事。⑤物毎の損徳(利害損得)をわきまゆる事。⑥諸事目利を仕覚ゆる事。(物事を見分ける眼を養う事)⑦目に見えぬ所をさとつて知る事。(あつそうかと本質を捉える事)⑧わづかなる事にも気を付くる事。(僅かな見落しが命取りになる)⑨役にたゝぬ事をせざる事なり。以上、九項目である。――そして、「……此道に限りて、直なる所を広く見たてざれば、兵法の達者とは成りがたし」とある。これは、極めて大事な「言葉」であり、まず、いわゆる「兵法の達者」(達人)となるためには、次の「二つのこと」が大事になるのである。その一つは、真つ直ぐな(正しい)「兵法」を日々鍛錬して、それをしつかりと習得(体得)すること。そして、もう一つは、この世の実に様々な物事を見る時も、偏つた狭い見方などはやめて、広い視野から全体を正しくとらえて、物事の「本質、真実、真理」などを見極めるようにしなければ、誠の「兵法の達人」とはなり得ないということである。それは、一体、どういう「意味合い」の言葉になるのかと問えば、それは、「風の巻」の中にもあるように、例えば、他流の「……長き刀、つよみの太刀、短き太刀、太刀かず多き、太刀の構え、跳んだり、はやきを用いる、その他」などは、いかにも「有効なもの」のように思ひなして、それらに余りにも「固執・執着」し過ぎている他流の「兵法」というのは、決して真つ直ぐな(正しい)「兵法」などとは言えず、それゆえ、そのような偏つた「兵法」ではなく、まさに真つ直ぐな(正しい)「兵法」を日々鍛錬して、それをしつかりと身につけ(体得)し、そして、ものの「見方」なども、偏つた狭い見方などはやめて、広い視野から物事を正しく見極めることこそ、何よりも大事なことになるのである。そして、この法を学び得ては、「……一身にして二十三十の敵にもまくべき道にあらず」とある。つまり、「……一人で二十人三十人の敵にも負けない」と言っているのである。

それは、「……先づま氣に兵法をたえさず、直なる道を勤めては、手にて打勝うちかち、目に見る事も人にかち、又鍛錬をもつて惣躰そうたいやわらか自由なれば、身にも人にかち、又此道に馴れたる心なれば、心をもつても人に勝ち、此所に至りては、いかにとして人にまくる道あらんや」とある。——それは、まず、気持ちの上で、兵法を究めようという氣力を絶やさず、真つ直ぐな（正しい）兵法を日々鍛錬すれば、「手」（それは「劍術」）において人に打勝うちかち、また、「目に見る事」（それは「物事の見極め」）にても人に勝ち、そして、身体は、日々の鍛錬によつて、まさに「柔軟さと強靱さと自在さ」とを兼ね備えて、「身」（身体）においても人に勝ち、さらに、この「道」（兵法）を深く修練した「心」なれば、その「心」を以ても人に勝ち、そのような鍛え抜かれた「手・目・身・心」を以てすれば、どうして人に負けるなどということがあり得るだろうか。

しかも、もつと「大きな兵法」（合戦）においては、「……善人よきひとを持つ事にかち、人数をつかふ事にかち、身をたゞしくおこなふ道にかち、国を治おさむる事にかち、民をやしなふ事にかち、世の例法をおこなふにかち、いづれの道におゐても、人にまげざる所をしりて、身をたすけ、名をたすくる所、是これ兵法の道也……」とある。つまり、この「兵法」を真に「学び得て」は、わが身を助け、わが名を助けることができ得るようになるのはもとより、ほかの「分野」の人たちにも負けるようなことはないと言っているのである。——これは、ただ単に「劍術」が上達したという領域を遙かに超越している。つまり、宮本武蔵という人は、若い時からの凄まじいまでの「武芸の修行」を何十年と続けた、その結果として、ただ単に「劍術」が上達しただけではなく、それに加えて、人間としての総合的な「内的成長（成熟）」をも同時に遂げていたということである。それは、一体、なぜなのかと敢えて問えば、それは、宮本武蔵の言う「兵法」（或いは「兵法の智慧」）というのは、ただ単に「劍術」だけに限つたものではなく、他の「武芸」（例えば「弓、鎗、鉄砲、長刀、馬術、その他」、また、様々な「学問」や「小芸」（例えば「連歌、茶、書画、細工」彫刻、その他）など、前述の「諸芸、諸職、その他」などをも含めた、まさに総合的な「智慧」であるからである。——以上、ここで、「地之巻」は、終わりにしたいと思う。

*

*

あとがき

本を読む

本を読むとは、表面的な「意味や内容」などをあれこれ追うことではない。本を読むとは、最終的には、作者の「心を読む」ことである。そして、作者の「心を読む」とは、すなわち、作者の「心の「つぶや」を聴くことである。そして、作者の「心の「つぶや」を聴くとは、すなわち、作者の「心の声をそのまま（生のまま）聴く」ということである。そして、作者の「心の声をそのまま聴く」ためには、まず最初に、われわれ人間は、この世に生まれて、今日まで生きてきた「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが生じることになるが、しかし、それらは、その人の「色メガネ」に過ぎず、それゆえ、その「色メガネ」を一度取り外すことによつてこそ、初めて、百％純粋な「眼」で「対象」そのものが見えて来るということである。

さて、自分の「心」をいわば「真つ白な状態」にしてから、いよいよ「本文」（原文）の「一字一句」を、それこそ、どこまでもゆつくりと、その「一字一句」を深く深く噛みしめるように深く深く読みだきながら、何度でも何度でもゆつくりとゆつくりと一字一句を、どこまでも深く厳密に読み解いていくことである。そうすれば、自然と作者の「魂の鼓動」（その息づかい）というものが、そのままそっくり（生のまま）聴えて来るということであり、それは、すなわち、すでに正保二年（一六四五年）に死んでいるはずの「剣豪・宮本武蔵」という人物の、まさに「魂の鼓動」（その魂の生の声）を、そのままそっくり（生のまま）聴くことが、初めて、「可能」になるということである。

②「水之卷」へと続く……。

平成二十九年七月吉日（改訂版）

如月翔悟

「五輪書」(宮本武蔵)
第二部(水の巻)

まえがき

さて、今回は、前回の「地之巻」の続編としての「水之巻」であるが、それでは、宮本武蔵は、なぜ、「水之巻」と名付けたかと問えば、それは、宮本武蔵の「兵法」（剣術）というのは、まさに「水を本」とするからであるが、それは、「……兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによって水の巻として、一流の太刀筋、此書に書頭はすもの也」とある。——つまり、宮本武蔵の「二天一流」という「兵法」（剣術）というのは、まさに「水を本」として、その「利方の法を行なう」（それは「その時々々の状況に応じて、最も有利な『剣術』『戦術』が刻々と選ばれていく」ということであり、それによって「水の巻」とし、そして、その「一流の太刀筋」（それは「宮本武蔵の太刀の使い方」）を、この書物『五輪書』（その中の「水の巻」）のなかに、具体的に「一つ一つ」書き記したものであり、それゆえ、それらをこれからできるだけ一つ一つ「原文」に寄り添いながら、丁寧に「考察」（つまり読み解いて）いきたいと思う次第であります。

平成二十九年七月吉日（改訂版）

如月翔悟

目次

まえがき

② 水之巻（水の巻）

- 一、兵法心持の事
- 一、兵法の身なりの事
- 一、兵法の目付といふ事
- 一、太刀の持ちやうの事
- 一、足づかひの事
- 一、五方の構の事
- 一、太刀の道といふ事
- 一、五つのおもての次第、第一の事（中段）
- 一、おもての第二の次第の事（上段）
- 一、おもて第三の次第の事（下段）
- 一、おもて第四の次第の事（左脇）
- 一、おもて第五の次第の事（右脇）
- 一、有構無構のおしへの事
- 一、敵を打つに、一拍子の打の事
- 一、二のこしの拍子の事
- 一、無念無相の打といふ事
- 一、流水の打といふ事
- 一、縁のあたりといふ事
- 一、石火のあたりといふ事
- 一、紅葉の打といふ事
- 一、太刀にかはる身といふ事
- 一、打つとあたるといふ事
- 一、秋猴の身といふ事
- 一、漆膠の身といふ事
- 一、たけくらべといふ事
- 一、ねばりをかくとといふ事
- 一、身のあたりといふ事
- 一、三つのうけの事
- 一、おもてをさすといふ事
- 一、心をさすといふ事
- 一、喝咄といふ事
- 一、はりうけといふ事
- 一、多敵のくらしいの事
- 一、打あいの利の事

- 一、一つの打うちといふ事
- 一、直通じきつうのくらいといふ事
- 一、「水の巻まき」の後記

あとがき

※ 参考文献

水の巻
すい
の
まき

序 水之巻

まず、本文であるが、それは、「……兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによつて水の巻として、一流の太刀筋、此書に書頭はすもの也。此道いづれもこまやかに心の儘にはかきわけがたし。縦ひことばはつゞかざるといふとも、利はおのづからきこゆべし。此書にかきつけたる所、一ことく、一字々々に思案すべし。大形におもひては、道のちがふ事多かるべし。兵法の利におみて、一人と一人との勝負のやうに書付けたる所なりとも、万人と万人との合戦の利に心得、大きに見たつる所肝要也。此道にかぎつて、少しなり共、道を見ちがへ、道のまよひありては、悪道へ落つるもの也。此書付ばかりを見て、兵法の道には及ぶ事にあらず。此書にかき付けたるを、我身にとつて書付くを、見るとおもはずならふとおもはず、にせ物にせずして、即ち我心より見出したる利にして、常に其身になつて、能々工夫すべし」とある。(原文)

さて、「水之巻」であるが、それは、「……兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによつて水の巻として、一流の太刀筋、此書に書頭はすもの也」とある。まず、「水を本」とするとは、すなわち、「水」というのは、本来、自らこれという「形」を持たず、置かれた「状況」に依じて、まさに自由自在に「変化していく」ものである。それと全く同じように、宮本武蔵の「二天一流」という「剣法」は、その時々々の状況に依じて、どのようなにも「戦い方」が変幻自在と変化して、何らかの形に固執することなく、刻々と変化する状況に依じて、その「剣術」(戦術)も刻々と変化して、その瞬間、その瞬間、まさに勝つための「最良の方法」が刻々と選ばれていくのである。それが、まさに「その時の利に合った兵法を行なう」ということであり、それゆえ、「水の巻」とする由縁であり、そして、「一流の太刀筋」の「一流」とは、一般の「一流」の意味ではなく、それは、まさに宮本武蔵の「二天一流の太刀筋」であり、そして、その「太刀筋」というのは、太刀(刀)の「使い方」(或いは「運び方」ということであり、それを「水之巻」で書き頭わすということである。

次に、「……此道いづれもこまやかに心の儘にはかきわけがたし。縦ひことばはつゞかざるといふとも、利はおのづからきこゆべし」とある。これは、もう書いてある通りであり、この道「兵法」(剣術)いづれにしても細やかに心のままに書き分けることはでき難い。たとえ言葉は「つゞかざる」(うまく続かない)としても、その「利」(理)は、自ずと聞こえて来るはずである。

そして、「……此書にかきつけたる所、一ことく、一字々々にて思案すべし。大形におもひて(いい加減に思つて学んだので)は、道のちがふ事多かるべし」とある。これは、極めて「大事な言葉」であり、「作者」(宮本武蔵)は、できるだけ「一語一語、一字一字」を噛みしめるように深く読んで、思案してほしいと、読者に強く要求しているのである。そうでなければ、自分の深い「思いや考え」などが正しく伝わらないからである。そして、「二字一句」を、文字通り、できるだけ丁寧に読んで欲しいという欲求は、ありとあらゆる真に優れた「作者」たちの「心の底」からの願いであるが、一方、多くの読者た

ちは、軽い気持ちで書かれた文字を目で追いながら、ただ「表面的な意味」などをあれこれ理解するだけで、まさに「一字一句」をどこまでも深く厳密に「読み解こう」などと思つて、どこまでも深く本を読んでいるような人などは、極めて少ないのである。しかし、それでは、作者の「魂の鼓動」(つまりは「魂の声」)を生のまま聴くというようなことは、永遠にでき得ないのである。

*

*

また、「……兵法の利におゐて、一人と一人との勝負のやうに書付けたる所なりとも、万人と万人との合戦の利に心得、大きに見たつる所肝要也」とある。これは、「兵法の利(理)」において、「一對一」の「勝負」のよう書き付けてある所でも、万人対万人との「合戦」の「利(理)」だと思つて、大きく見立てることが「肝要(大事)」である。そして、「……此道にかぎつて、少しなり共、道を見ちがへ、道のまよひありては、悪道へ落つるもの也」とある。この「道(兵法・剣術の道)」に限つては、ほんの少しでも「道(正しい道)」を見違えて、道に迷ふことあれば、すなわち、「悪道」へと墜ちてしまうものである。また、「……此書付ばかりを見て、兵法の道には及ぶ事にあらず。此書にかき付けたるを、我身にとつて書付くを、見るとおもはずならふとおもはず、にせ物にせずして、即ち我心より見出したる利にして、常に其身になつて、能々工夫すべし」とある。まず、この「書付」(つまり『五輪書』ばかりを見たり読んだりしているだけでは、とても「兵法の道」(その「神髄」)へなど及びも寄らないことである。大事なことは、この「書物」に書いてあることを我が身のことだと思ひ、その「書付」を、(ただ単に他人事のように)、見ると思はず、習うとも思はず、そのような(通り一遍の)「まねごと」などにせず、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)から見出した「利(理)」だと思つて、常に「その身」(その氣)になつて、日々、鍛練すべきことである。

一、兵法心持の事

まず最初は、「兵法心持の事」という項目であるが、それは、「……兵法の道におゐて、心の持ちやうは、常の心に替る事なかれ。常にも、兵法の時にも、少しもかはらずして、心を広く直にして、きつくひつばらず、少しもたるまず、心のかたよらぬやうに、心を中心に置いて、心を静かにゆるがせて、其ゆるぎのせつなも、ゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし。静かなる時も心は静かならず、何とはやき時も心は少しもはやからず、心は躰につれず、躰は心につれず、心に用心して、身には用心をせず、心のたらぬ事なくして、心を少しもあまらせず、うへの心はよはくとも、底の心をつよく、心を人に見わけられざるやうにして、小身なるものは心に大きな事を残らずしり、大身なるものは心にちいさき事を能くしりて、大身も小身も、心を直にして、我身のひいきをせざるやうに心をもつ事肝要也。心の内にこらず、広くして、ひろき所へ智恵を置くべき也。知恵も心もひとみながく事専也。知恵をとぎ、天下の利非をわきまへ、物毎の善悪をしり、よろづの芸能、其道をわたり、世間の人にすこしもだまされざるやうにして後、兵法の知恵となる心也。兵法の智恵におゐて、とりわけちがふ事有るもの也。戦の場万事せはしき時なりとも、兵法の道理をきわめ、うごきなき心、能々吟味すべき」ことである。

*

*

まず、「……兵法の道におゐて、心の持ちやうは、常の心に替る事なかれ。常にも、兵法の時にも、少しもかはらずして、心を広く直にして、きつくひつばらず、少しもたるまづ、心のかたよらぬやうに、心をまん中におきて、心を静かにゆるがせて、其ゆるぎのせつなも、ゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし」とある。

さて、その「意味内容」であるが、それは、「……兵法の道において、心の「持ちやう」（持ち方）は、常（ふだん）の心に替ることはない。常（ふだん）の時にも、兵法（戦い）の時にも、少しも変わることもなく、心を広く直（まっすぐ）にして、きつくひつばらず（過度に緊張せず）、少しもたるまず（気を弛めることもなく）、心の片寄らないやうに、心を真ん中において、心を静かにゆるがせて、そのゆるぎが一瞬も止まらないやうに、つねに流動自在な心の状態を保つこと」であり、よくよく吟味すべきこととある。

*

*

*

これは、まさに「名文」そのものである。なぜなら、これは、ありとあらゆる分野のありとあらゆる人たちが心得てもよい「心の持ちよう」だと思うからである。まず、「常の心」とは、まさに「ふだんの心」であるが、しかし、それは、ただだらしな自堕落な心の「平常心」ではなく、やはり心身ともに、真に鍛錬された心の「平常心」ということになるのだろう。また、「心を広く直にして」とあるが、それは、目の前のことばかりに近視眼的に固執するのではなく、もっと広い「視野」（視点）から全体を見渡して、しかも、ゆがんだ見方はやめて、全体をしつかりととらえる（見極める）ということであり、また、「きつくひつばらず」とは、過度に緊張しないで、程よい緊張を保ちながら、しかし、少しもたるむことなく、心は（一方に）片寄らないやうに、常に真ん中に（しつかりと）おいて、しかも、「心を静かにゆるがせて」とあるが、この言葉の「微妙さ」を軽々しく読み流してはいけない。それを敢えて「映像」で表現すれば、それは、まさに静かな「湖水の面」のようであれ！ ということであり、……心を静かにゆるがせて、其ゆるぎのせつなも、ゆるぎやまぬやうに……。それが、まさに「平常心」であり、——例えば、過度の「喜怒哀楽」などによって、静かな「湖水の面」が激しく揺れ動いて、まさに「自分を見失う」（或いは「振りまわされる」）ようであってはいけないのであり、それゆえ、（日頃から、心身ともに常に「ベストの状態」を保ちながら）、たとえいかなる「事態」に臨んでも、慌てず冷静に対応でき得るやうな、そういう「平常心」を常に保つやうに心がけることが何よりも肝要だということである。

*

*

そして、「……静かなる時も心は静かならず、何とはやき時も心は少しもはやからず、心は躰につれず、躰は心につれず、心に用心して、身には用心をせず、心のたらぬ事（不足）なくして、心を少しもあまらせず、うへの心はよはくとも、底の心をつよく、心の人に見わけられざるやうにして、小身なるものは心に大きな事を残らずしり、大身なるものは心にちいさき事を能くしりて、大身も小身も、心を直にして、我身のひいきをせざるやうに心をもつ事肝要也」とある。

*

*

まず、動きが静かなる（静止している）やうな時も、心は静かならず（静止せず）、また、動きが何とはやき時（いかに早く動く時）にも、心は少しも早からず（平静を保ち）、そして、心は、躰（の動き）につられず、躰は、心（の動き）につられず、（常に平常心

を保ち)、心に用心(注意)をおき、身は「用心」(注意)せず、心の不足をなくし(充実させて)、心を少しもあまらせず(心は余計なことにとらわれず)、うへ(表面)の心は弱くとも、底の心(心底)は強く持ち、心は、人に見分けられぬようにして、小身(小さな身体)の人は、心に大身(大きな身体)の人の事を残らず知り、大身(大きな身体)の人は、心に小身(小さな身体)の人の事をよく知って、大身も小身も、心をまつすぐにして、わが身のひいきをしないように心を持つことが肝要(大事)である。——例えば、大石内蔵助の「吉原遊び」、その他などでも、心は、躰(たい)につられず、躰は、心につられず、うへ(表面)の心は弱くとも、底の心(心底)は強く持ち、また、心は、人に見分けられないようにして、その「心」(心底)と「躰」(行動)とは一致してはいないが、しかし、その心の底の「平常心」は、つねに保たれていたというようなことである。

ちなみに、宮本武蔵は、六尺(一八〇センチ)ほどの背丈(身長)があつたので、自分とは違う小身(小さな身体)の人というのは、一体、どのような「ものの考え方」や「身の動きや動かし方」などをするのか? そのようなこともよく知っておかなければならないという思いがあつたのかも知れない。

そして、「……心の内にござらず、広くして、ひろき所へ智慧を置くべき也。知恵も心もひとと(二途に)みかく事専(肝要)也。知恵をとき、天下の利非(理非)をわかまへ、物毎の善悪をしり、よろづの芸能、其道／＼をわたり(それぞれ経験し)、世間の人にすこしもだまされざるやうにして後、兵法の知恵となる心也。兵法の智慧におみて、とりわけちがふ事有るもの也。戦(たたかひ)の場万事せはしき時なりとも、兵法の道理をきわめ、うごきなき心(動揺なき心)、能々吟味すべし」とある。

まず、心の内は、(不純物で)濁らず、広くして、「ひろき所へ智慧を置く」(それは「一大工」の知恵に留まらず、広く世の中全般を見る「大工の頭領」の《総合的な》知恵を持つこと)である。そして、知恵も心も一途に磨くことが何よりも「肝要」である。知恵を磨き、天下の「道理」をわかまへ、物毎の「善悪」を知り、よろづの芸能、その道／＼をできるだけ経験して、世間の人にすこしもだまされぬようになって、初めて、まさに「兵法の智慧」となるのである。「兵法の智慧」においては、とりわけ「他の知恵」とは違う「総合的な智慧」なのである。戦(たたかひ)の場は、万事あわただししい時でもあるが、兵法の道理を極めて、まさに「動きなき心」(動揺なき平常心)を体得し、それを保つべきである。

さて、一般論としての、いわゆる「平常心」というのは、たとえ「外界」がどのような刻々と「変化・変貌」しようとも、また、たとえ「外界」からどのような過激な「刺激・影響」を受けようとも、そういうものに意味なく振りまわされるのではなく、まさに「常の心」(つまり「平常心」)を保つということである。——それは、「静かな湖水の面」に、風が吹いたり、鳥などが飛び立てば、どうしても大小様々な「波紋」が広がることになるが、しかし、やがて、「静かな湖水の面」に戻るように、たとえその瞬間は、「心が揺れた」としても、すぐに元の「静かな湖水」(つまり「平常心」)を取り戻して、冷静にかつ的確に対応することこそ、何よりも大事なことである、ということである。

一、兵法の身なりの事

次は、「兵法の身なりの事」という項目であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……身のかゝり、顔はうつむかず、あをのかず、かたむかず、ひずまず、目をみださず、ひたいにしわをよせず、まゆあいにしわをよせて、目の玉うごかざるやうにして、またゝきをせぬやうにおもひて、目をすこしすくめるやうにして、うらやかに見ゆるかを、鼻すじ直すくにして、少しおとがいを出す心なり。くびはうしろのすじを直に、うなじに力をいれて、肩より惣身そうみはひとしく覚おぼへ、両のかたをさげ、脊せすじをろくに、尻を出さず、ひざより足先まで力をいれて、腰のかゝまざるやうに腹をはり、くさびをしむるといひて、脇差わきざしのさやに腹をもたせて、帯のくつろがざるやうに、くさびをしむるといふおしへあり。惣そう而して兵法の身におゐて、常つねの身みを兵法の身とし、兵法の身をつねの身とする事肝要也。能吟味すべし」（原文）とある。これは、宮本武蔵自身、自分の「ふだんの身のあり方」を想い出しながら記述しているものであり、それゆえ、実際の宮本武蔵自身のふだんの「身のあり方」とは、まさに「ここに書かれているような様子」であつたということでもあるのだろう。

まず、「身のかゝり」（からだ 身体の姿勢）であるが、それは、「……顔はうつむかず、あおむかず、かたむかず、まげず、また、目はみださず、額ひたいにしわを寄せず、眉間みげんにしわを寄せて、目玉は動かさず、瞬まばたきもしないような気持ちで、目を少し細めるようにして、全体をうらやかに（おだやかに）見るような感じの顔だちで、鼻すじを真っ直ぐにして、少し下あごを出すような心持ちにする。くびは、真っ直ぐにして、うなじに力をいれて、肩より下の全身はみな同じことになるが、それは、両方の肩を下げ、背筋を真っ直ぐにして、尻を出さず、膝ひざより足先まで力をいれて、腰を曲げないように腹を張り、くさびをしめるといって、脇差わきざしのさやに腹をもたせて、帯のゆるくならないように、くさびをしめるといふ教えがある。そして、兵法の身において、常つねの身みを兵法の身とし、兵法の身をつねの身とする事が何よりも肝要（大事）なことである」とある。

それでは、これらをもつと簡略してみると、それは、まず、「……何よりも姿勢を正しくして、目玉は、動かさず、目は、眉間みげんにしわを寄せるような感じで、少し細めにして、全体をうらやかに（両わきまで）見るような感じの顔だちで、両肩を下げて、膝ひざより足先まで力をいれて、腰を曲げないように腹を張り、尻は出さずに、くさびをしめるといって、帯をしつかりと締めてから、そこに刀を差す」というようなことである。

例えば、この「姿」をどこかに求めるとしたら、例えば、時代劇の映画やドラマの中の一連の三船敏郎の「侍や素浪人」姿などが、あるいはこれに近いのかも知れない。それはともかく、ふだんの時も、また、戦いの時も、つねに鍛錬された「同じ姿勢」（同じ「風格」を保つようにすることが、何よりも大事であるということである。

一、兵法の目付といふ事

それでは、次は、非常に有名な「目付めつけ」について考えてみたいと思う。まず、いろいろなところで「目付めつけ」については語られています。最初は、「水の巻まき」の中の「目付めつけ」に

ついでであり、その「本文」は、次のようなものである。つまり、

* *
目の付けやうは、大きに広く付くる目也。観見二つの事、観の目つよく、見の目よはく、遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事、兵法の専(第一)也。敵の太刀をしり、聊かも敵の太刀を見ずといふ事、兵法の大事也。工夫有るべし。此目付、ちいさき兵法にも、大きなる兵法にも、同じ事也。目の玉うごかずして、両わきを見る事肝要也。かやうの事、いそがしき時、俄にはわきまへがたし。此書付を覚へ、常住此目付になりて、何事も目付のかわらざる所、能能吟味あるべきもの也」とある。

* *
では、その「意味内容」であるが、それは、「……目の配り方は、大きくひろく配るよ
うにすること。観見二つの見方があるが、大事なのは、『観の目』(つまり『全体を見る
眼』を強くし、一方、『見の目』(つまり『目の前の現象を見る目』は、弱くすること。
そして、遠い所も近く見、近い所も遠く見る。それは、いわばカメラの『ズームのよう
な《眼》であれ!』ということである。そして、敵の太刀(筋)を知り、少しを相手の太刀
を見ないように、それは、相手の太刀の動きに惑わされないようにすることが大事である。
そして、この『目付』は、一対一で戦う時でも、また、大勢で戦う時でも、全く同じこと
であり、また、目の玉を動かさず、そして、両わきを見るようにすることが、何よりも肝
要(大事)なことである」としている。

* *
さて、何よりも大事なことは、まさに「観の目」であり、その「観の目」には、大きく
次の三つの「意味合い」があるということである。その一つは、全体を見る眼である。次
は、相手の心を見る(読む)眼であり、そして、もう一つは、総合的に判断する眼である。
——まず最初の「全体を見る眼」というのは、実際に「自分の目」に見えている状態では
あるが、「全体を見る」ためには、目玉は動かさず、瞬きもせぬようにして、両わきを見
るようにする「眼」である。次に、「相手の心を見る(読む)眼」というのは、直接、相
手の「心を見る」ことはできない。それゆえ、まさに「相手の心を読む」という「眼」で
あり、この「眼」は、「見る目」と「心の眼」とを合わせて、初めて「見えて来る」もの
である。そして、最後の「総合的に判断する眼」というのは、「見る目」と「心の眼」と、
もう一つは、今までの「全過去」からのまさに「経験知」や「学習知」なども合わせた、
まさに総合的な「眼」であり、この「眼」は、刻々と変化する状況に応じて、まさに刻々
と判断を下していく「眼」である。この三つの「眼」を絶えず磨き鍛えることが、何より
も大事なことになるということである。

* *
次に、「兵法三十五箇条」の中にある「目付」の項目であり、それは、次のような内容
である。つまり、「……目を付ると云所、昔は色々在ることなれ共、今伝る処の目付は、
大体顔に付るなり。目のおさめ様は、常の目よりもすこし細き様にして、うらやかに見る
也。目の玉を動かさず、敵合近く共、いか程も、遠く見る目也。其目にて見れば、敵のわ
ざは申すに及ばず、左右両脇迄も見ゆる也。観見二ツの見様、観の目つよく、見の目よは
く見るべし。若又敵に知らすると云ふ自在り、意は目に付、心は物に付かざる也。能々吟
味有べし」(全文)とある。

まず、宮本武蔵は、目には「かんけん観見」の「二種類」があり、そして、「かん観の目つよく、けん見の目よはく見るべし」と言っている。つまり、一つは、「けん見の目」であり、この「目」は、「かん感覚器官（五感）」の一つである「けん視覚」（つまり「目」）のことである。そして、もう一つは、「けん全体を見る眼」（それは「けんうらやかな眼」でもあるということである。それは、それは、宮本武蔵は、なぜ、「けん見の目よはく見るべし」と言っているのだろうか？ それは、次のようなことである。——つまり、「かん感覚器官（五感）」の一つである「けん視覚」（つまり「目」というのは、どうしても「かん表面的な現象」を追ってしまふ。目に見えるものを、そのまま「けん事実」（或いは「けん真実」）として見てしまふ。例えば、小さな幼児たちは、目に見えるものが、そのまま「けん事実」（或いは「けん真実」）として見ているのである。そして、「目」には、実に様々な「かん現象」（つまり「かん表面的な現象」）が見えている。

つまり、われわれ人間の「目」というのは、どうしても様々な「かん表面的な現象」に絶えず振りまわされて、あまりに「かん近視眼的に目の前の現象ばかりを追っている」ために、逆に、全体が見えなくなっている。絶えず変化する「かん目の前の現象」に意味なく振りまわされて、ああでもないこうでもないと思惑するばかりになってしまう。だからこそ、その「目」を弱くして、つまり、「……常の目よりもすこし細き様にして、うらやかに見る目」にして、様々な「かん表面的な現象」などに意味なく振りまわされないように、また、あまりに「かん近視眼的に目の前の現象ばかりを追っている」状態から、むしろ「かん全体を見る」ような状態へとするためである。そして、その「かん目のおさめ様」は、「……常の目よりは少し細めるような感じにして、うらやかに見る目」であり、その「かん観の眼」というのは、目の玉を動かさず、敵がどれほど近くても、いか程も遠く見る目である。その目にて見れば、敵のわざは申すに及ばず、左右両脇までも見えるものである。かん観見二つの見方があるが、かん観の目つよく、けん見の目よわく見ることが肝要（大事）である」ということである。

さて、一般に、われわれ人間の「目」というのは、どうしても「かん表面的な現象」をあれこれ追ってしまう。それは、刻々と変化していく「かん表面的な現象」に意味なく振りまわされている状態であるが、そのような「かん表面的な現象」（つまり「かん見た目の感じ」）というのは、いわば「かん仮相」（つまり「かん仮の姿」）であり、「かん実相」そのものではない。それゆえ、物事の「かん仮相」ではない、もっと奥にある物事の「かん実相」そのもの（つまり「かん真の姿」）をとらえることが、まさに「かん心の眼」（或いは「かん魂の眼」）の役割になるということである。そして、その「かん心の眼」（或いは「かん魂の眼」）というのは、いわばその人の「かん知性＋感性＋感性」のようなものであり、それには、当然のことながら、「かん個人差」がはっきりとあるということである。——つまり、言葉を換えれば、われわれ人間の「目」によって捉えられるものは、物事の「かん表面的な現象」に過ぎず、それは、かん絶えず変化して止まることのないものであり、それゆえ、まさに「かん仮相」（つまり「かん仮の姿」）であるが、その「かん表面的な現象」のもっと奥にある物事の「かん本質、かん真実、かん真理、かん源泉、その他」などを厳密にとらえることが、すなわち、「かん実相」（つまり「かん真の姿」）をとらえるということであるとともに、それは、かん真に「かん内的成長（成熟）」した「かん心の眼」によってこそ、初めて、どこまでも厳密にとらえることができ得るようになるということである。そして、この「かん心の眼」（或いは「かん魂の眼」）をもってすれば、宮本武蔵がそうであるように、ただ単に「かん剣

術」だけではなく、この世のありとあらゆる分野の物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密にとらえることも、十分に可能になるということである。

*

*

ちなみに、「意は目に付、心は物に付かざる也」とあるが、これは、一体、どういう意味かと問えば、それは、次のようなことである。つまり、「目」というのは、どうしても具体的な「対象」を見ているので、どうしてもああだこうだという「意味」を追ってしまふ。一方、「心」というのは、むしろ「全体」をうらやかに見ているのであり、それゆえ、個々の「対象そのもの」をじっくり見ているわけではない。——つまり、個々の「対象」を見ているのは、まさに「目」であり、その「目」は、どうしても「意味」を追ってしまふ。一方、「心」(或いは「観の眼」というのは、むしろ「全体」をうらやかに見ているのであり、それゆえ、個々の「対象そのもの」をじっくり見ているわけではない。つまり、「心」(或いは「観の眼」というのは、個々の「対象」(つまり「物」)にはこだわっていないので、まさに「心は物に付かざる」ということになるわけだ。そして、「……遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事」や、また、「……敵合近く共、いか程も、遠く見る目也」という「目の状態」にしても、それは、「カメラの眼」で言えば、その「カメラの眼」をズームにしても元に戻しても、いわゆる「全体の風景」そのものは、何も変わらないうのと全く同じことであり、それが、まさに「観の眼」(或いは「心の眼」)でもあるということである。——例えば、「弓の名人」が「風の心臓」を射抜くというような物語や、或いは、那須与一が、遠く船上の「扇の的」を射抜いたというようなことも、結局は、「観の眼」(或いは「心の眼」ということ)であり、そういうことが、宮本武蔵にも、当然のことながら、でき得たということである。

*

*

例えば、宮本武蔵は、飛んでいる蠅をハシで捕まえることができたという。その真偽のほどはよく分からないが、それは、一体、どういうことかと敢えて問えば、それは、次のようなことではないかと思う。——つまり、宮本武蔵の「眼」(「観の眼」「心の眼」)は、刻々と変化していく「表面的な現象」(つまり「蠅の動き」)をただ意味なく追っているのではない。むしろ「目」は動かさず、常の目よりもすこし細き様にして、うらやかに見ている状態であり、それは、蠅の「全体の動き」をじっと深く静かに観ているのである。——そして、それは、自分の気配を消し、自ら「蠅の身」(或いは「蠅の心」となつて深く溶け入り、一体となり、じっと「蠅の動き」を深く観入っているうちに、蠅の動きの微妙な「特徴」までもが観えてきて、次にどのよう動くかも予測できるようになつた時に、宮本武蔵は、一瞬にして、その飛んでいる蠅をハシで捕まえるのであり、その「瞬間」は、まさに「蠅が止まっているように観えている」というようなことかも知れない。

一、太刀の持ちやうの事

次に、「太刀の持ちやうの事」という項目があるが、その「本文」は、次のようなものである。つまり、「……太刀のとりやうは、大指ひとさしを浮ける心にもち、たけ高指しめずゆるまず、くすしゆび・小指をしむる心にして持つ也。手の内にはくつろぎのある事悪しし。敵をきるものなりとおもひて、太刀をとるべし。敵をきる時も、手のうちにかわり

なく、手のすくまざるやうに持つべし。もし敵の太刀をはる事、うくる事、あたる事、おさゆる事ありとも、大ゆび・ひとさしゆびばかりを、少し替る心にして、とにも角にも、きるとおもひて、太刀をとるべし。ためしものなどきる時の手の内も、兵法にできる時の手のうちも、人をきるといふ手の内に替る事なし。惣而、太刀にても、手にても、いくとゆふ事をきらふ。いつくは、しぬる手也。いつかざるは、いきる手也。能得心得べきもの也」とある。——これは、極めて大事な「説明」であり、まず、太刀の「持ち方」は、親指と人差し指を浮かすような気持ちで持ち、中指は、しめずゆるめず自然体で持ち、最後は、「小指と薬指」とをしめる気持ちで、「すき間」なく持つこと、これが「太刀の持ち方」になるが、何より大事なのは、「小指と薬指」とをしめて持つということである。

これは、実際に「ナベ」や「フライパンの取っ手」などを「手の平」に持って、「小指と薬指」とでしめて握れば、「……ああ、なるほど、こういう感じか」と、はっきりと実感できるとともに、もちろん、本来は、まず、木刀なら木刀の「柄の部分」を「親指と人差し指」その他でふつうに握り、それから、「小指と薬指」とで「柄の部分」をしめて握れば、それが「刀の持ち方」であり、その「持ち方」で木刀を少しぶらぶらさせて、「親指と人差し指」との握りに浮きを持たせてから、最初は、「小指と薬指」とをしめる感じを持ちながら、木刀を上下左右斜めどちらにも自由に振ってみれば、「……ああ、なるほど、これが刀の持ち方か」と、はっきりと「実感」でき得るかと思う。

そして、宮本武蔵は、何度も「……きるとおもひて、太刀をとるべし」と言っている。これには、一体、どのような「意味合い」があるのかと問えば、それは、もちろん、斬ることが何より「第一の目的」だからであるが、それに加えて、例えば、よく「避難訓練」などを行なったりすることがあるが、その時は、まさに実際の「避難」だと思つて真剣に行なえ！ と言っているのである。どうせ「練習」だからとだらだらやっていたのでは、何の「意味も成果」もないということである。そして、「……太刀にても、手にても、いつくといふ事をきらふ。いつくは、しぬる手也。いつかざるは、いきる手也」とある。この「居着く」というのは、まさに「動きが止まる」ということであり、それは、太刀でも手でも、止まった手は、死んだ手であり、一方、絶えず動きを持っている手こそは、まさに「生きた手」であるということである。

一、足づかひの事

次に、「足づかひの事」についての項目があるので、これについて、簡単に説明しておきたいと思う。本文は、次のようなものである。「……足のはこびやうの事、つまさを少しうけて、きびすをつよく踏むべし。足づかひは、ことによりて大小・遅速はありとも、常にあゆむがごとし。足に飛足、浮足、ふみすゆる足とて、是三つ、きらふ足也。此道の大事にいはいく、陰陽の足といふ、是肝心也。陰陽の足とは、片足ばかりうごかさぬもの也。きる時、引く時、うくる時迄も、陰陽とて、右ひだり右ひだりと踏む足也。返々、片足ふむ事有るべからず。能々吟味すべきもの也」(原文)とある。——さて、「風の巻」にも、この「足づかひ」の記述があるので、ここではまとめて説明しておきたいと思う。

*

*

まず、足の「運び方」というのは、つま先を少し浮かせて、かかとを強く踏むべしとあ

る。また、足づかいは、その時々状況によって、大小・遅速はあるだろうが、常に「あゆむがごとし」とある。これは、極めて大事な「言葉」であり、結局は、自然な「足づかい」「こそは、まさに「第一」であるとしている。もちろん、宮本武蔵がここで言っている自然な「足づかい」と、われわれ現代人の、今日の「ウォーク」（つまり「歩き方」）の基本である、まさに「……かかとから着地し、その時、つま先は少し浮いた状態から地面へと着く」とは、どこがどのように違うのかはよくわからないが、ただ、剣を交えての時の「足づかい」というのは、まさに、次の「陰陽の足」が大事となっているのである。

そして、いわゆる「飛足、浮足、ふみつむる足、その他」が、なぜ、よくないのかと言えは、まず、「飛足」は、飛び上がって着地した瞬間、動きが止まったり、バランスを崩したり、また、すぐに次の動作ができ難いからである。また、「浮足」は、戦いになると、必ず「浮き足」になりやすいが、しっかりと踏むのがよい。そして、「ふみつむる足」というのは、踏み詰まる足であるが、それは、「待ち」の足であり、さらによくはない。それゆえ、何よりも大事なものは、「陰陽の足」であり、その「陰陽の足」というのは、片足だけを動かすのではなく、それは、斬る時も、引く時も、受ける時も、つねに「右ひだり右ひだりと交互に踏む足」こそは、まさに最上の「足運び」になるということである。

これは、今日の「剣道」の「竹刀を振る練習」の時にも、必ず、まさにこの「陰陽の足」で、前後何十回と竹刀の「素振り」（振り下ろし）を連続して行なうものである。

一、五方の構の事

さて、次は、「五方の構」であるが、それは、剣術の基本的な「構え方」であり、その本文は、次のようなものである。つまり、「……五方のかまへは、上段、中段、下段、右のわきにかまゆる事、左のわきにかまゆる事、是五方也、構五つにわかつといへども、皆人をきらん為也。構五つより外はなし。いづれのかまへなりとも、かまゆるとおもはず、きる事なりとおもふべし。構の大小はことにより利にしたがふべし。上中下は躰の構也。両わきはゆふ（応用）の構也、右ひだりの構、うへのつまりて、わき一方つまりたる所などにての構也。右ひだりは所によりて分別あり（選ぶべし）。此道の大事にいはいく、構のきまわりは中段と心得べし。中段、構の本意也。兵法大きにして見よ。中段は大将の座也。大将のつぎ、あと四段の構也。能々吟味すべし」とある。

*

*

まず、宮本武蔵の「剣術」では、五つの「構え方」があり、その「五つの構え方」の中でも、上段・中段・下段は、まさに「基本の構え方」であり、一方、両わきは、いわば「応用の構え方」である。「構え」というのは、この「五つ」以外にはない。そして、右ひだりの構えは、上が詰まったり、わき一方が詰まった所などでの構えであり、また、右ひだりは、その「場所や状況」に応じて選ぶべきものである。その中でも、「中段」こそは、まさに「最良の構え」であり、そして、「兵法」を大きくしてみれば、「中段」は、まさに「大将の座」であり、あとの「四つの構え」は、それに続くものである。また、構えは、その場面その場面で最も有利な「構え」をとるべきである。

そして、構えは、この「五つ」に分かれるが、すべて「人を斬らんがため」であり、しかも、構えると思わず、「人を斬ること」だと思えとある。——これは、一体、どうい

ことを意味するのかと問えば、それは、構えが大事なのではなく、相手を斬ることこそ第一であり、そのための「構え」に過ぎないのである。「構え」にあまりに固執すれば、それは、「待ちの心」となり、相手の「攻撃」を待つことにもなる。それでは、後手になる。大事なのは、その場面その場面で最も有利な「構え」（それは「相手を最も斬りやすい構え」）を選び、そして、相手の攻撃を待つのではなく、先手先手と仕掛けて、優位な「立場」（心）を持って、相手を窮地へと追い込み、そして、確実に勝つということである。

一、太刀の道といふ事

では、次は、「太刀の道といふ事」について、考えてみたいと思うが、その本文は、次のようなものである。つまり、「……太刀の道を知るといふは、常に我さす刀をゆび二つにてふる時も、道すじ能くしりては自由にふるもの也。太刀をはやく振らんとするによつて、太刀の道さかいてふりがたし。太刀はふりよき程に静かにふる心也。或は扇、或は小刀などつかふやうに、はやくふらんとおもふによつて、太刀の道ちがいてふりがたし。それは小刀きざみといひて、太刀にては人のきれざるもの也。太刀を打ちさげては、あげよき道へあげ、横にふりては、よこにもどりよき道へもどし、いかにも大きにひちをのべて、つよくふる事、是太刀の道也。我兵法の五つのおもてをつかひ覚ゆれば、太刀の道定まりて、ふりよき所也。能々鍛練すべし」とある。

*

*

さて、この文章の中で最も「大事な言葉」は、まさに「太刀の道筋」（刀の「振り方」）をよく知ることである。—— 例えば、人を斬る時には、いわゆる「袈裟懸け」という有名な「太刀の道筋」があるが、そのような「太刀の道筋」をよく知ることである。そして、その次に大事なことは、太刀をはやく振ろうとすれば、必ず、「太刀の道」に逆らつて振りにくくなってしまう。それゆえ、太刀は振りよいように静かに振るよう心がけること。—— 例えば、扇や小刀のようにはやく振ろうとすると、必ず、「太刀の道」を違えて振りにくくなるとともに、はやく振りまわす太刀では、そもそも「人を斬ること」さえできないのである。例えば、太刀を振り下げたら、その振り下げた位置から、上げよき「道筋」へ上げ、また、横に振つたら、横にもどりよき「道筋」へ戻してやる。そのような「太刀の道筋」をしつかりと身に付けることが、何よりも大事なことであり、そして、いかにも大きくひじを伸びして、つよく（しつかりと）振ること。これが、まさに「太刀の道筋」というものである。

つまり、「太刀の道」を知るとは、すなわち、「太刀の道筋」を知ることであり、それは、いつも腰につけている「刀」を「指二つ」（小指と薬指）とで振る時も、まさに「太刀の道筋」（それは「太刀の振り道」）を日々鍛練をして、真に習得でき得れば、まさに「……刀を無理なく、自由自在に振ることができ得るようになる」のである。

一、五つのおもての次第。第一の事

では、今度は、五つある「構え」からの「太刀の道」（つまり「太刀の道筋」）の一つ一つについての説明であるが、まず、最初は、第一の「構え」（つまり「中段」）からで

あり、その本文は、次のようなものである。

* 第一の構、中段。太刀さきを敵の顔へ付けて、敵に行相ふ時、敵太刀打ちかくる時、右へ太刀をはずして乗り、又敵打ちかくる時、きつききがへしにて打ち、うちおとしたる太刀、其儘置き、又敵の打ちかくる時、下より敵の手はる、此第一也。惣別、此五つのおもて、書付くるばかりにては、合点成りがたし。五つのおもてのぶんは、手にとつて、太刀の道稽古する所也。此五つの太刀筋にて、我太刀の道をもしり、いかやうにも敵の打つ太刀しるる所也。是二刀の太刀の構、五つより外にあらざとしらする所也。鍛練すべきなり。

* * ます、中段は、太刀を相手の顔に付ける。(これが基本である)。そして、敵と出くわして、敵が太刀で打ちかかって来た時は、右へ太刀をはずして乗り、また、敵が打ちかかって来た時は、切つ先返しにして打ち、振り下ろした太刀は、そのままにして、また、敵が打ちかかって来た時に、下から敵の手をはるのである。これが「第一の基本」である。そして、宮本武蔵自身、総じて、この「五つのおもて」(つまり「五つの基本」)を書き付けたもの(説明)だけでは、合点がいかないだろうから、「五つのおもて」(つまり「五つの基本」)の分(ところ)は、実際に手に太刀を持って、稽古すべきとわざわざ記しているのである。

そして、この「五つの太刀筋」によって、宮本武蔵の「太刀の道」(つまり「太刀の道筋」)を知り、また、いかようにも敵の打つ太刀(筋)をも知ることができるようになるのである。そして、わが「二刀一流」の構えは、この「五つの構えより外にない」と知らせるためでもあるのである。(よくよく)鍛練すべきである。

一、おもての第二の次第の事

次は、第二の「構え」(つまり「上段」)であるが、それは、「……第二の太刀、上段に構へ、敵打ちかくる所、一度に敵を打つ也。敵をうちはずしたる太刀、其儘おきて、又敵のうつ所を、下よりすくひ上げてうつ。今一つ打つも同じ事也。此おもての内におゐては、様々の心持、色々の拍子、此おもてのうちをもつて、一流の鍛練をすれば、五つの太刀の道こまやかにしつて、いかやうにも勝つ所あり。稽古すべき也」とある。

まず、上段に構え、敵が打ちかかるところを、一気に打つのである。そして、敵をうちはずした太刀は、そのままにして、敵が打つて来るところを、つかさず下からすくい上げて打つのである。もう一度打つ時も同じことである。この(五つの)「表て」(基本)の内には、様々な心の持ち様、色々な拍子はあるが、この「表ての打ち」(基本の打ち方)を以て、宮本武蔵の「兵法」(剣術)の鍛練を行なえば、五つの「太刀の道」(つまり「太刀の道筋」)を詳しく習い覚えて、いかようにも勝つことができるのである。

ちなみに、上段の構えは、本来、中段から上段へと太刀を振り上げる手間(時間)を省いて、敵よりも一秒でも早く、太刀を一気に下へ打ち下ろすための構えである。

一、おもて第三の次第の事

では、次は、第三の「構え」(つまり「下段」)であるが、それは、「……第三の構、下段に持ち、ひつさげたる心にして、敵の打ちかくる所を、下より手をはる也。手をはる所を、亦敵はる太刀を打ちおとさんとする所を、こす拍子にて、敵打ちたるあと、二のうでを横にきる心也。下段にて敵の打つ所を一度に打ちとむる事也。下段の構、道をはこぶに、はやき時も遅き時も、出合ふもの也。太刀をとつて鍛錬あるべき也」とある。

まず、下段に持ち、引つ下げたような感じで、敵が打ちかかってくるところを、下から手をはるのである。手をはる所を、また、敵は、そのはる手を打ち落とそうとして、敵打ちたるあと、つかさず相手を超える拍子を以て、相手のその二の腕を横に斬るのである。そのように、下段にて、敵の打つて来るところを、一気に打ち止めてしまうのである。

そして、最後の「……下段の構、道をはこぶに、はやき時も遅き時も、出合ふもの也。

太刀をとつて鍛錬あるべき也」というのは、つまり、「……下段は、敵の打つて来るところを、下から打ち止めることができる」ものであり、そのように、「下段の構え」からの太刀(刀)というのは、(敵の攻めの)速い時も遅き時も、それに十分「対応できる有効なもの」であり、それゆえ、太刀をとつてしっかりと鍛錬あるべきことである。

一、おもて第四の次第の事

次は、第四の「構え」(つまり「左の脇に構える」というものであるが、それは、「……第四の構、左の脇に横にかまへて、敵の打ちかくる手を下よりはるべし。下よりはるを、敵打ちおとさんとするを、手をはる心にて、其儘太刀の道をうけ、我肩のうへへすぢかいにきるべし。是太刀の道也。又敵のうちかくる時も、太刀の道を受けて勝つ道也。能々吟味あるべし」とある。これは、次のような「意味内容」になるかと思う。

まず、左の脇に、太刀を横にして構え、そして、敵が打ちかかってくる手を下からはるのである。一方、下からはるところを、敵は、それを打ち落とそうとする、その手をはる心になって、つかさず太刀の道筋を受けて、自分の肩の上へ「筋違い」(つまり「斜め」)に斬り上げるのである。これが「太刀の道筋」である。再び、敵が打ちかかってくる時も、まさに「太刀の道筋」を以て、敵に勝つのである。能々吟味あるべきことである。

一、おもて第五の次第の事

最後は、第五の「構え」(つまり「右の脇に構える」というものであるが、それは、「……第五の次第、太刀の構、我右の脇に横にかまへて、敵打ちかくる所のくらいをうけ、我太刀下のよこよりすぢかへて、上段にふりあげ、うへより直にきるべし。是も太刀の道、能くしらため也。此おもてにてふりつけぬれば、おもき太刀自由にふるるゝ所也。此五つのおもてにおゐて、こまかに書付くる事にあらず。我家の一通太刀の道をしり、亦大形拍子をも覚へ、敵の太刀を見わくる事、先づ此五つにて、不断手をからす所也。敵とたゝかいのうちにも、此太刀筋をからして、敵の心を受け、色々の拍子にて、いかやうにも勝つ所也。能々分別すべし」とある。

まず、自分の右脇に、太刀を横に構えて、敵が打ちかかってくる「位」(状況)に応じ

て、その自分の太刀を下の横から筋替えて、上段に振り上げ、上から真っ直ぐ振り下ろして斬るのである。これもまた「太刀の道筋」であり、その「道筋」をよく知るためのものである。基本的な「太刀の道筋」を振り慣れれば、重い太刀でも自由に振れるようになるのである。そして、この「五つのおもて（基本）」については、詳細に書き付けることではない。「我家」（「二天一流」）の一通の「太刀の道筋」を知り、また、大方（おおかた）の「拍子」をも覚え、敵の太刀（筋）を見分けられるようになるには、まずは、これらの「五つの道筋」を日頃から「手をからず」（徹底的に習熟すること）が大事であり、そうすれば、敵との「戦い」の時にも、これらの「太刀筋」を「からず」（本来「涸らす」で、し尽くす、という意味であり、ここでは「すべて自在に使い切つて」、（その時々）の「相手（敵）の心」の変化に対応して、様々な「拍子」を以て、どのようにも勝つことができるようになるのである。

一、有構無構のおしへの事

さて、今度は、有名な「有構無構」という項目であるが、それは、「……有構無構といふは、太刀をかまゆるといふ事あるべき事にあらず。され共、五方に置く事あれば、かまへともなるべし。太刀は、敵の縁により、所により、けいきにしたがい、何れの方に置きたりとも、其敵きりよきやうに持つ心也。上段も時に随ひ、少しさがる心なれば中段となり、中段を利により少しあぐれば上段となる。下段もおりにふれ、少しあぐれば中段となる。両脇の構も、くらいにより少し中へ出せば、中段・下段共なる心也。然るによつて、構はありて構はなきといふ利也」とある。そして、「……先ず太刀をとつては、いづれにしてなりとも、敵をきるといふ心也。若し敵のきる太刀を受くる、はる、あたる、ねばる、さわるなどいふ事あれども、みな敵をきる縁なりと心得べし。うくると思ひ、はると思ひ、あたるとおもひ、ねばるとおもひ、さわるとおもふによつて、きる事不足なるべし。何事もきる縁と思ふ事肝要也。能々吟味すべし。兵法大きにして、人数だてといふも構也。みな合戦に勝つ縁なり。いつくといふ事悪しし。能々工夫すべし」とある。

*

*

これは、非常に面白い「考え方」であり、まず、「前半部分」から考えてみたいと思うが、それは、一言で言えば、まさに「……構えはあつて構えはなきに等しい」ということである。つまり、宮本武蔵の「剣術」では、「……刀を構えるということあるべきではない」と言っている。とは言え、実際には「五つの構え」があるわけだが、それは、敵の「出方」を機縁（きつかけ）として、場所により、その時々々の状況に応じて、まさに「五つの構え」の何れかの「構え」をするとしても、それは、敵を最も「斬りよい」ように「刀を持つ」ということである。例えば、上段も、その時の状況判断により、少し下げた方がよいと思えば、中段になり、また、中段も、その時の状況判断により、少し上げた方がよいと思えば、上段になる。そして、下段も、その時の状況判断により、少し上げた方がよいと思えば、中段になる。また、両脇の構えも、（相手の）位（状況）により少し中へ出せば、中段・下段ともなる。従つて、「構はあつて構はないという理由になる」のである。

つまり、宮本武蔵がここで特に言いたいことは、まさに「構え」に固執するな、ということである。そして、何よりも大事なことは、「構え」などでは決してなく、あくまでも

相手を「斬ること」(相手に「勝つこと」)であり、そのための「構え」に過ぎないのである。——例えば、若しも「敵」が斬りつける(その)太刀を受ける、はる、あたる、ねばる、さわる」なども、すべて「相手を斬る」ための縁に過ぎず、それ自体が大事なのではなく、すべては「相手を斬る」ために必要な「動作」(過程)に過ぎないのである。従って、相手の刀を「……受ける」と思い、はると思い、あたると思い、ねばると思い、さわると思うことによって、きる事不足なるべし」とある。それは、つまり、ただ単に「受ける」と思うのではなく、それは、まさに「……受けたら、すぐさま相手を斬ると思へ」ということである。そうでなければ、斬ることが不十分になってしまふ。つまり、何事も斬る縁と思うことが肝要(大事)であり、このことは、よくよく吟味すべきことである。

一方、「大きな兵法」(合戦)の場合でも、「人数だて」(それは「軍勢の配置・布陣」というのは、まさに「構え」になるのである。それでは、なぜそのような「構え」にするのかと問えば、それは、まさに「合戦に勝つ」ための「縁」に過ぎず、「構え」自体は、あくまでも勝つための一つの「戦術」に過ぎないのである。それゆえ、ある「構え」(「軍勢の配置・布陣」)に「居付く」(それにあくまでも固執して留まる)のは、愚かなことであり、その時々状況に応じて、勝てるような、新たな「構え」(「軍勢の配置・布陣」)へと、どんどん変えていくべきである。このことは、よくよく工夫すべきことである。

つまり、刀の「構え方」(或いは「戦い方」というのは、その時の「敵の出方により、場所により、その時々状況に応じて」、まさに「水の如く」に変幻自在と「変化していく」)ものであり、それが、冒頭の「兵法二天一流の心」は、まさに「水を本」とするという言葉の「真意」であり、また、「利方の法をおこなふ」とあるが、それは、何らかの「やり方」に固執するのではなく、相手に勝つ「最良の方法」を、その時その時に刻々と自在に選んで行なうことによつて、まさに「水の巻」として、そして、「一流の太刀筋」とは、まさに宮本武蔵の「刀の振り方」(或いは「刀の運び方」ということであり、それを「水の巻」で書き頭わすということである。

一、拍子の間を知ると云事

ところで、宮本武蔵には、いわゆる「兵法三十五箇条」という覚え書きがあり、その中の二十二番は、「拍子の間を知ると云事」であるが、その「本文」は、次のようなものである。つまり、「……拍子の間を知るは、敵により、はやきも在り、遅きもあり、敵にしたがふ拍子也。心おそき敵には、太刀あひに成と、我身を動さず、太刀のおこりを知らせず、はやく空にあたる、是一拍子也。敵の気のはやきには、我身と心をうち、敵動きの迹を打事、是二のこしと云也。又無念無相と云は、身を打様になして、心と太刀は残し、敵の気の間を、空よりつよくうつ、は無念無相也。又おくれ拍子と云は、敵太刀にてはらんとし、受んとする時、いかにもおそく、中にてよどむ心にして、まを打事、おくれ拍子也。能工夫あるべし」とある。

*

*

まず、「……敵によつて、(気)のはやいのもあれば、遅いものもある。その敵に合わせた打ち方の拍子」である。——まず、「心」(気)の遅い敵には、太刀合いになる時、わが身も動かさず、太刀の起こりも全く知られないほど、素早く空より打つこと。これが

「一拍子」である。また、「心」(氣)のはやく敵には、わが身も心を打つと見せて、敵の「動きの迹」につかさず打ち入るのである。これが「二の腰の打」というものである。また、無念無相というのは、身は打つ身にして、心と太刀は残し、敵の「氣の間」を、空より強く打つこと。これが「無念無相」である。また、おくれ拍子というのは、敵、太刀で張ろうとし、また、受けようとする時、いかほども遅く、途中、淀むような心にして、間合いを置いて打つこと、これが「おくれ拍子」である。よくよく工夫あるべきことである。そして、この二十二番の「覚え書き」に該当する内容にあたるのが、まさに『五輪書』の中の「次の幾つかの項目」になるのである。

一、敵を打つに、「一拍子の打の事」

まず最初は、「敵を打つに、「一拍子の打の事」という項目があるので、この項目から、ごく簡単に説明しておきたいと思う。それは、次のような本文である。つまり、「……敵を打つ拍子に、「一拍子」といひて、敵我あたるほどのくらいを得て、敵のわきまへぬうちを心に得て、我身もうごかさず、心も付けず、いかにもはやく、直に打つ拍子也。敵の太刀、ひかん、はづさん、うたんと思ふ心のなきうちを打つ拍子、是一拍子也。此拍子能くならひ得て、間の拍子をはやく打つ事鍛錬すべし」とある。

これは、まず、相手を「心遅き敵」と見切った時に仕掛ける「業」であるが、それは、「……敵と自分とが刀が届くほどの近い距離で、相手にその気配を全く気づかれないうちに、わが身も動かさず、心も付けず、いかにも早く、真つ直ぐ打つ拍子である。敵が太刀をひかん、はづさん、うたんと思ふ心のなきうちを打つ拍子であり、これが「一拍子」である。この拍子しつかりと習い得て、間の拍子をはやく打つことを鍛錬すべき」ことである。これは、まさに「一撃必殺」(或いは「先手必殺」)の技であり、相手も、自分がいつ斬られたのかも分からないほどの早業であり、これこそは、兵法の「達人」のみに出来得る、いわば「特技」とも言うべき凄まじいまでの「技」なのである。

例えば、映画の『椿三十郎』の最後の「決闘場面」は、もちろん、宮本武蔵の「一拍子」とは違うものであるが、ただ、お互いの「間合い」は、「……敵と自分とが刀が届くほどの距離で、相手にその気配を全く気づかれないうちに、わが身も動かさず、心も付けず、いかにも早く、(直に)打つ拍子という点」では、どこか似たところはあるのである。ただ、映画の場合、椿三十郎は、逆手で刀を抜き、(これでは人は斬れない)。それゆえ、右手を添えて相手を斬っている。これで実際人が斬れるのか？ また、映画の場合、相手に先に抜かせて、それよりも素早く抜いて相手を斬るという映像的効果を狙っているが、宮本武蔵の「一拍子」は、相手が全く気づかないうちに、素早く抜いて斬るのである。

一、二のこしの拍子の事

次は、「二の腰の拍子」ということであるが、それは、「……二の腰の拍子、我打ちださんとする時、敵はやく引き、はやくはりのくるやうなる時は、我打つとみせて、敵のは

りてたるむ所を打ち、引きてたるむ所を打つ、是二のこしの打也。此書付斗にては、中く打得がたかるべし。おしへうけては、忽ち合点のゆく所也」とある。

*

*

これは、まず、相手を「心はやき敵」と見切った時に仕掛ける「業」であり、それは、「……最初、自分が打ちだそうとする時、敵は、素早く身を引こう、或いは、素早く張って避けようという（気配が感じられた）時」には、それこそ、まさに「心はやき敵」であるが、その時は、「……我、打つと見せて、（いわばフェイントをかけて）、相手が素早く張ったその直後の、ほんの瞬間の気のゆるみに、つかさず一気に打ち入るのである。また、相手が素早く身を引いたその直後の、ほんの瞬間の気のゆるみに、つかさず一気に打ち入るのである。つまり、「拍子」（タイミング）をずらして打ち入る。これが、まさに「二の腰の打」ということである。むろん、この「書き付け」だけでは、なかなか合点がいかないだろうが、しかし、実際に「教え」を受ければ、すぐにも合点のいくことである。

一、無念無相の打といふ事

次は、最も有名な「無念無相の打といふ事」であり、それは、「……敵も打ちださんとし、我も打ちださんと思ふ時、身も打つ身になり、心もうつ心になつて、手はいつとなく空より後ばやにつよく打つ事、は無念無相とて、一大事の打也。此打たび／＼出合ふ打也。能々ならひ得て鍛錬あるべき儀也」とある。これは、最も大事な「打ち方」であり、この「無念無相の打ち方」を体得することこそは、まさに「達人への道」なのである。

*

*

それは、今、將に「……敵も打ちだそうとし、我も打ちだそうとして、身も打つ身となり、心も打つ心になつて」時、それは、まさに「身も心」も、まさに相手を「打とう」（斬ろう）と一点に集中している時には、手は、いつとなく「空より」（つまり「長年の鍛錬の結果、体で覚え込んだ技術は、無意識のうちに）、自然と「その後から」、これは、「身と手」は、決して同時に動くのではなく、動く「我身」のその後から、手が（自然と）出てきて強く打つことになるのである。これが「無念無相」と言つて、まさに「一大事の打ち方」（つまり「最も大事な打ち方」）になるのである。この「打ち方」は、極めて有効な「打ち方」であるので、よくよく習い覚えて、鍛錬あるべきことである。そして、この「無念無相の打ち方」を体得することこそ、まさに「達人への道」なのである。

一、流水の打といふ事

次は、「流水の打」ということであるが、それは、「……流水の打といひて、敵相になりてせりあふ時、敵はやくひかん、はやくはづさん、早く太刀をはりのけんとする時、我身も心も大きになつて、太刀を我身のあとより、いかほどもゆる／＼と、よどみのあるやうに、大きにつよく打つ事也。此打、ならひ得ては、慥に打ちよきもの也。敵のくらいを見わくる事肝要なり」とある。これが、まさに「おくれ拍子」ということである。

*

*

まず、「……敵と互角にせりあう時、敵は、早く引こう、早く外そう、早く太刀をはね

のけようとしている」時は、その相手の「拍子」の裏をかいて、「……わが身も心も大きくなって、太刀をわが身の後から、いかほどもゆるやかに、よどみがあるように、大きく強く打つこと」である。つまり、いかほども「遅い拍子」で、「相手の拍子」を狂わせて、相手を打つことである。——この「打ち方」(つまり「流水の打」というのは、習って確と身につければ、慥に「打ちよいもの」である。そして、敵の「位」(それは気の早い遅いその他)などをしっかりと見分けることが、何よりも大事なことになるのである。

一、縁のあたりといふ事

次は、「縁のあたり」ということであるが、それは、「……我打出す時、敵打ちとめん、はりのけんとする時、我打一つにして、あたまをも打ち、手をも打ち、足をもうつ。太刀の道一つをもつて、いづれなりとも打つ所、是縁の打也。此打、能能打ちならひ、何時も出会ふ打也。細々打ちあひて分別あるべき事也」とある。

まず、「縁のあたり」ということであるが、それは、「……自分も打ち出し、敵もそれを打ち止めよう、はねのけようとする時、自分が打つ一打だけで、相手の頭をも打ち、手をも打ち、足をも打つ。それは、太刀の道筋一つで、相手のいづれなりとも打つことができる」というものである。これが、まさに「縁の打」というものである。これは、狙って「打つ」というよりは、太刀の道筋のその一振りで、結果として、いろいろな所に「あたる」というものである。この打ち方は、よくよく打ち習い覚えれば、いつでもどこでも有効な打ち方であり、それゆえ、何度も打ち合つて(身を以て)知っておくべきことである。

一方、「兵法三十五箇所」の二十七番では、「……縁のあたりと云は、敵太刀切懸るあひ近き時は、我太刀にて張る事も在り、受る事も在り、あたる事も在り。受るもはるもあたるも、敵を打つ太刀の縁とおもふべし。乗るもはづすもつぐも、皆うたんだためなれば、我身も心も太刀も、常に打たる心也。能々吟味すべし」とある。

まず、「縁のあたり」ということであるが、それは、「……縁のあたりというのは、敵の太刀が斬りかかるくらい近い時には、わが太刀にて張ることもあれば、受けることもあり、また、あたることもある」。しかし、受けるもはるもあたるも乗るもはづすもつぐも、その他、それらすべては、それ自体が「目的」などではなく、すべては「相手を打つ」(つまり「相手を斬る」)ための「縁」(過程)に過ぎないのである。それゆえ、何よりも大事なことは、まさに「わが身も心も太刀」もすべて、常に「相手を打つ」(つまり「相手を斬る」)ことだと思えということである。

例えば、サッカーなどでも、まさに「シュートを決める」ことこそ、何よりも大事なことで(つまり「真の目的」)であり、それゆえ、その過程の華やかな「パフォーマンス」その他などは、すべて「二次的なこと」だと思えということである。

一、石火のあたりといふ事

次に、「石火のあたり」ということであるが、それは、「……石火のあたりは、敵の太刀と我太刀と付合ふほどにて、我太刀少しもあげずして、いかにもつよく打つ也。是は足もつよく、身もつよく、手もつよく、三所をもつてはやく打つべき也。此打、たび／＼ならわずしては打ちがたし。よく鍛錬すれば、つよくあたるもの也」とある。

*
まず、「石火のあたり」ということであるが、それは、相手の太刀と自分の太刀とが触れ合うほど近い時に、「……自分の太刀を少しも上げないで、いかにも強く打つことである。この時は、足も強く、身も強く、手も強く、この三カ所を以て、素早く打つこと」である。この「打ち方」(つまり「石火のあたり」というのは、何度も実際にしつかりと習い覚えて確と身に付けなければ、簡単に打てるようなものではない。よく鍛錬すれば、強く打つことが出来るようになるのである。

一、紅葉の打といふ事

さて、次は、「紅葉の打」ということであるが、それは、相手の太刀を「打ち落として、手から放す」ということであり、その本文は、次のようなものである。つまり、「……紅葉の打、敵の太刀を打ちおとし、太刀取りはなす心也。敵前に太刀を構へ、うたん、はらん、うけんと思ふ時、我打つ心は、無念無相の打、又石火の打にても、敵の太刀を強く打ち、その儘あとをねばる心にて、きつきさがりにうてば、敵の太刀必ずおつるもの也。此打鍛錬すれば、打ちおとす事やすし。能能稽古あるべし」とある。

*
これは、まず、「……敵が目の前に太刀を構えて、打とう、払おう、受けようと思つて、自分の打つ心」というのは、例えば、無念無相の打、或いは、石火の打、何でもよいが、大事なものは、敵の太刀に自分の太刀を強く打ち、そのままあとをねばる心にて、その太刀をまさに「切つ先下がり」に打てば、敵の太刀は、必ず下に落ちるものである。この「打ち方」(つまり「紅葉の打」というのは、日々「鍛錬」すれば、相手の太刀を打ち落とすことも、容易なこととなるのである。よくよく稽古あるべきことである。

一、太刀にかはる身といふ事

次は、「太刀にかはる身といふ事」ということであるが、その本文は、次のようなものである。つまり、「……身にかはる太刀ともいふべし。惣而、敵を打つに、太刀も身も、一度にはうたざるもの也。敵の打つ縁により、身をばさきへうつ身になり、太刀は身にかまはず打つ所也。若しは、身はゆるがず、太刀にてうつ事はあれども、大形は身を先へ打ち、太刀はあとより打つもの也。能々吟味して打ちならふべき也」とある。

*
まず、「太刀にかはる身」ということであるが、それは、身にかはる太刀とも言えるものであるが、総じて、敵を打つに、太刀も身も、一度には打たないものである。敵の打つ縁によつて、まず先に、身から打つ身になり、太刀は、そのあと、身に從つて打つものである。或いは、身は動かさず、太刀だけで打つこともあるが、大方は、身を先に打ち、太刀

は、そのあとから打つものである。——つまり、ここで最も大事なことは、多くの場合、太刀も身も、一度には打たないものである。まず、身を先に打ち、それは、身を先に入れて、太刀は、その後から自然と打ち出すことになるのである。つまり、「身を入れて（から）打て」ということである。よくよく吟味して、打ち習い覚えるべきことである。

一、打つとあたるといふ事

次は、「打つとあたるといふ事」であるが、それは、「……打つといふ事、あたるといふ事、二つ也。打つといふ心は、いづれの打にても、思ひうけて髓に打つ也。あたるといふ心は、ゆきあたるといふ心にて、何と強くあたり、忽ち敵の死ぬるほどにても、是はあたるといふ也。打つといふは、心得て打つ所也。吟味すべし。敵の手にても足にても、あたるといふは、先づあたるといふ也。あたりて後を、つよくうたんためなり。あたるといふは、さわるほどの心、能くならひ得ては、各別の事也。工夫すべし」とある。

*

*

これは、「打つ」と「あたるといふ事」との違いであり、「打つ」といふのは、意識的に「頭」なら「頭」を狙い定めて、強く「打つ」ということであり、一方、「あたるといふ事」は、太刀を振り下ろした結果として、たまたま太刀が「頭」に「あたった」ということである。そして、それがどれほど強く、たちまち敵が死ぬほどであっても、それは「あたるといふ事」なのである。つまり、「打つ」といふのは、はっきりとした「意識」（目的）を以て、（狙ったところを）強く打つことであり、このことは、よくよく吟味すべきことである。

例えば、敵の手であれ、足であれ、（たまたま）それにあたるは、まず「あたるといふ事」であり、それは、いわば「かすり傷」程度であるが、あたりて後、今度は、強く「打つ」、強く「打つ」、相手を確実に仕留めるのである。あたるといふは、さわるほどの心（感じ）であり、よく習得しては、各別（別々）のことと知り、よく「工夫すべき」ことである。

一、秋猴の身といふ事

次は、「秋猴の身」ということであるが、それは、「……秋猴の身とは、手を出さぬ心なり。敵へ入身に少しも手を出さぬ心なく、敵打つ前、身をはやく入る心也。手を出さぬと思へば、必ず身の遠のくものなるによつて、惣身をはやくうつり入る心なり。手にてうけ合はするほどの間には、身も入りやすきもの也。能々吟味すべし」とある。

*

*

これは、非常に「興味深い文章」であり、まさに相手の「懐への入り方」の心得なのである。——まず、「……秋猴の身とは、手を出さぬ心である。敵の懐へと入る時には、少しも手を出さぬ心なく、敵を打つ前、身を素早く入れる心である。それは、打とうと思つて入れば、必ず、手が先に出て、身は遠のいてしまうだろう。だからこそ、打とうとは思つて思わず、身だけをさつと素早く移すというような気持ちで、相手の懐へ入れ、ということである。つまり、身を素早く入れて、それから打てということ」である。——それは、すなわち、「……手から入るな、身から入って、打て」ということである。そして、「手にてうけ合はするほどの間」とあるが、これは、一般には、「手が届くほどの距離であれ

ば」となるが、ここでは、手と手がチャンバラをし合えるほどの距離になれば、身も入りやすくなるものである。よくよく「吟味あるべき」ことである。

一、しつかうの身といふ事

さて、次は、「漆膠しつこうの身」であるが、それは、「……漆膠しつこうとは、入身いりみに能く付きてはなれぬ心也。敵の身に入る時、かしらをもつけ、身をもつけ、足をもつけ、つよくつく所也。人毎ひとごとに顔足ははやくいれども、身ののくもの也。敵の身へ我身わがみをよくつけ、少しも身のあいのなきやうにつくもの也。能々吟味有るべし」とある。

*

*

まず、「漆膠しつこうの身」ということであるが、それは、「……相手の身に自分の身をしっかりと密着させて離れないようにすること。その時には、頭もつけ、身もつけ、足もつけ、すべて強く密着させることである。人ごとに、顔や足は早く入るけれど、身は、どうしても退くものであるという。しかし、大事なことは、敵の身に我が身をしっかりと密着させて、少しもすき間のないように付けろということである。それは、なぜかと言えば、それは、少しでもすき間がある場合は、まさに「……敵が色々とわざを仕掛けることが可能になる」からである。

一、たけくらべといふ事

次に、「たけくらべ」ということであるが、それは、「……いづれにても敵へ入込む時、我身のちぢまざるやうにして、足をものべ、こしをものべ、くびをものべて、つよく入り、敵のかほとかほとならべ、身のたけをくらぶるに、くらべかつと思ふほど、たけ高くなつて、強く入る所、肝心也」とある。

*

*

まず、「たけくらべ」ということであるが、それは、「……どのような時でも、敵の懐に入り込む時は、我が身が縮こまらないように、足をも伸ばし、腰をも伸ばし、首をも伸ばして、強く入り、そして、敵と顔と顔をならべ、身のたけを比べるような時には、相手に比べ勝つと思うほどに、たけを高くして、強く入ることが、大事である」としている。――これは、時代劇の「映画」や「テレビドラマ」などで、よく観る場面であり、例えば、刀と刀、顔と顔とをつき合わせて、お互いが強く押し合っているような場面であり、そのような場合には、「……自分の背たけを少しでも高くして、相手を圧する気迫で迫れ」ということである。

一、ねばりをかかるといふ事

次は、「ねばりをかける」ということであるが、それは、「……敵もうちかけ、我も太刀打ちかくるに、敵うくる時、我太刀敵の太刀に付けて、ねばる心にして入る也。ねばるは、太刀はなれがたき心、あまりつよくなき心に入るべし。敵の太刀につけて、ねばりをかける時は、いか程も静かに入りてもくるしからず。ねばるといふ事と、もつるゝといふ事、

ねばるはつよし。もつるゝはよはし。此事分別有るべし」とある。

*

*

まず、「ねばりをかける」ということであるが、それは、「……敵も打ち、我も打ち、敵が受けた時、自分の太刀を相手の太刀に付けて、ねばるといふ心持ちにして入るといふ事である。ねばるとは、太刀が離れないようにする心持ちであるが、あまり強くない気持ちで入るべきであり、敵の太刀に付けて、ねばりをかけて内に入る時は、いかほども静かに身を入りてもよい」とある。そして、「……ねばるといふ事と、もつれるといふ事、ねばるはつよし、もつるゝはよはし」とある。つまり、「ねばる」は、自分の意志でそうしているものであり、それは、相手を制して優位に立っている状態である。一方、「もつれる」は、混乱して、收拾がつかない状態であり、相手を制することが出来ずに、むしろ相手にふり回まわされている状態でもあるので、まさに「弱し」ということになるのである。

一、身のあたりといふ事

次は、「身のあたり」ということであるが、それは、「……身のあたりは、敵のきわへ入りこみて、身にて敵にあたる心なり」とある。それは、「……少し我顔わがをそばめ、我左の肩を出し、敵のむねにあたる也。あたる事、我身をいかほどもつよくなりあたる事、いきあふ拍子ひょうしにて、はづむ心に入るべし。此入る事、入りならひ得ては、敵二間にけんも三間さんけんもはげのくほど、つよきもの也。敵死入るしにほどもあたる也。能々鍛錬よやくたれんあるべし」とある。

*

*

まず、「身のあたり」ということであるが、それは、「……敵のきわへ入り込んで、わが身を敵に当てる」ということである。——それは、少し顔をそむけて、左肩を出し、その左肩を勢いよく、弾みをつけて、相手の胸へと当てる。当てる時には、わが身をいかほども強くなって当てるのであり、ばったり出会った拍子ひょうしを以て、思いつきり弾むようにして入るべし。この「身のあたり」をしっかりと習得すれば、敵を二間にけんも三間さんけんもふっ飛ばせるほど、それほど力強いものである。敵が死ぬほどに強くあたる。よくよく「鍛錬あるべき」ことである。

一、三つのうけといふ事

次は、「三つのうけ」ということであるが、それは、「……三つのうけといふは、敵へ入りこむ時、敵打出す太刀をうくるに、我太刀にて敵の目をつくやうにして、敵の太刀を我右のかたへ引きながしてうくる事、亦またつきうけといひて、敵打つ太刀を、敵の右の目をつくやうにして、くびをはさむ心につきかけてうくる所、又敵の打つ時、短き太刀にて入るに、うくる太刀はさのみかまはず、我左の手にて、敵のつらをつくやうにして入りこむ、是三つのうけ也。左の手をにぎりて、こぶしにてつらをつくやうに思ふべし。能々鍛錬有るべきもの也」とある。

まず、ここでの「最大の問題」は、右手一本だけで受けるのか、それとも両手二刀で受けるのか、という問題であり、ここでは両手二刀で受ける場合として考えてみたい。

一つは、敵へ入りこむ時、敵の打ち出す太刀を受ける場合、左の「短刀」で敵の目を突

くようにして、敵の打ち来る太刀は、右手の「太刀」で右の肩の方へ引き流して受ける。

一つは、「突き受け」というものであり、それは、まず、左の「短刀」で敵の右目をつくようにし、そして、敵の打ち来る太刀は、その左の「短刀」と右手の「太刀」とで敵の首をはさむようにして、まさに「十字で受ける」というものである。

一つは、敵が打って来る時、左手の「短刀」で入るに、右手の「太刀」のことはあまり気にせず、とにかく、「……わが左の手にて、敵のつらをつくようにと思つて、入れ」（つまりカウンターで入れ）ということである。これらが「三つのうけ」であり、いずれの場合も、「……左の手をにぎりて、こぶしにてつらをつくように思ふべし」とある。

一、おもてをさすといふ事

次は、「面をさす」ということであるが、それは、「……面をさすといふは、敵太刀相になりて、敵の太刀の間、我太刀の間に、敵のかほを我太刀さきにてつく心に、常に思ふ所肝心也。敵の顔をつく心あれば、敵の顔、身も、のるもの也。敵ののらするやうにしては、色々勝つ所の利あり。能々工夫すべし。たゞかいの内に、敵の身のる心ありては、はや勝つ所也。それによつて、面をさすといふ事、忘るべからず。兵法稽古の内に、此利、鍛練あるべきもの也」とある。

*

まず、「面をさす」ということであるが、それは、敵と太刀相になった時に、「……敵の顔をわが太刀先でつくように常に思うことが何よりも肝心（大事）である」としている。そして、「……敵の顔をつく心あれば、敵の顔も身ものけぞるものである。そして、敵のけぞらせれば、色々勝つところの利（利点）も生じるものである。よくよく工夫すべきことである。戦いの最中に、敵の身のけぞるようなところあれば、はや勝つところでもある。それゆえ、面をさすということ、決して忘れるべきではない。兵法の稽古の時にも、この利、鍛錬あるべき」とある。つまり、太刀は、常に「相手の顔」を突く気迫を見せて、敵をじりじりのけぞらせることが、何よりも肝要（大事）であるということである。

一、心をさすといふ事

次は、「心をさす」ということであるが、それは、「……心をさすといふは、戦のうちに、うへつまり、わきつまりたる所などにて、きる事いづれもなりがたき時、敵をつく事、敵のうつ太刀をはづす心は、我太刀のむねを直に敵に見せて、太刀さきゆがまざるやうに引きとりて、敵のむねをつく事也。若し我くたびれたる時か、亦是刀のきれざる時などに、此儀専らもちゆる心なり。能々分別すべし」とある。

*

まず、「胸をさす」ということであるが、それは、「……戦いの時に、上がつまつたり、わきがつまつたりする場所などでは、斬ることは、どちらも難しいので、その時には、敵の胸を突くのである。そして、敵の打つ太刀を外して、敵の胸を突く心（方法）とは、わが太刀のむねを真っ直ぐに敵に見せて、太刀先がゆがまないように引き戻して、敵の胸を突くのである。また、自分がくたびれた時とか、刀が切れなくなった時などにも、この『方

法』をもつばら用いるのである。よくよくこのこと分別（わきまえる）べきである。つまり、場所が狭くて、太刀（刀）を自由に振り回せず、敵を斬ることがどちらも難しい時などには、相手の「胸をさす」ということであり、それは、体が疲れた時とか、刀が切れなくなった時なども、この「方法」をもつばら用いるのである。

一、かつとつといふ事

次は、「喝咄」というあまり聞き慣れない言葉であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……喝咄といふは、いづれも、我打ちかけ、敵をおつこむ時、敵また打ちかへすやうなる所、したより敵をつくやうにあげて、かへしにて打つ事、いづれもはやく拍子を以て、喝咄と打ち、喝とつきあげ、咄とうつ心也。此拍子、何時も打あいの内には、専ら出合ふ事也。喝咄のしやう、きつさきあぐる心にして、敵をつくと思ひ、あぐる」と一度にうつ拍子、能く稽古して吟味あるべき事也」とある。

*

*

まず、「喝咄」ということであるが、それは、「……どのような場合でも、自分が打ちかけ、敵を追い込み、そして、敵がまた打ち返すような場面では、下から敵を突くように上げると同時に、つかさず打つこと」である。どちらも「速い拍子」を以て、「喝咄」と（連続して）打ち、それは、喝と突き上げ、咄と打つ心である。この拍子、何時も打ち合いの時には、極めて頻繁に用いるものである。そして、その「喝咄の仕方」というのは、切っ先を上げるようにして、敵を突くと思つて上げると同時に、つかさず上から強く打つ拍子、よく稽古して吟味あるべきことである。

つまり、自分が打ちかけ、敵を追い込み、そして、相手がまた打ってきた時は、つかさず下から相手をつくように刀をつき上げると同時に、間髪入れず、相手を上から強く打つということである。これは、まさに「連続技」であり、瞬時に、「喝とつきあげ、咄とうつ心」である。よくよく稽古して吟味あるべきことである。

一、はりうけといふ事

次は、「はりうけ」ということであるが、それは、「……はりうけといふは、敵と打合ふ時、とたん／＼といふ拍子になるに、敵の打つ所を、我太刀にてはりあわせ打つ也。はり合はする心は、さのみきつくはるにあらず、亦／＼くるにあらず。敵の打つ太刀に応じて、打つ太刀をはりて、はるよりはやく敵を打つ事なり。はるにて先をとり、打つにて先をとる所肝要也。はる拍子能くあへば、敵何とつよく打ちても、少しはる心あれば、太刀さきのおつる事にあらず。能く習ひ得て吟味有るべし」とある。

*

*

まず、「はりうけ」ということであるが、それは、「……敵と打ち合う時、とたん／＼という拍子、これは、どたんとたんとした拍子になった時には、敵の打つて出るところを、自分の太刀で張つて、つかさず打つ」ということである。つまり、張る（はたく）というのは、それほど強くはたいたり、受けたりすることではなくて、敵の打つ太刀に応じて、打つ太刀をはたき、はたくよりもはやく敵を打つことである。そして、張ることで、先手

を取り、また、打つことで先手を取ることが肝要(大事)とある。張る拍子がよく合えば、敵がどれほど強く打つて来ても、少し張る程度で十分であり、それで自分の太刀先が落ちるといふようなことはないのである。このことをよく習い覚えては、よくよく「吟味あるべき」ということである。

*

*

これは、まさに「張って打つ」(つまり「相手の刀をはたく、同時に打つ」ということ)であり、これもまた、「連続技」であり、その場合、決して強くはたく必要はなく、それは、敵の打つ太刀に応じて、打つ太刀をはたくのであり、そして、何よりも大事なことは、まさに「……はたくこと」で先手を取り、また、打つことで先手を取り、しかも、はたくよりもはやく敵を打つ」ことである。その素早い「連続技」をしつかりと身につけることであり、それは、張る拍子を会得すれば、敵がどれほど強く打つて来ても、少し張るだけで十分であり、それで自分の太刀先が落ちるようなことはなく、さらに大事なことは、まさに「張るよりもはやく敵を打つこと」であり、その「打つ」(斬る)ことこそは、何よりも最優先の「第一の目的」であることを、決して忘れてはいけないのである。

一、多敵のくらい

最後は、「多敵のくらい」という有名な「項目」であるが、その「本文」は、次のようなものである。つまり、「……多敵のくらいといふは、一身にして大勢とたかふ時の事也。我刀わきざしをぬきて、左右へひろく、太刀を横にすて、かまゆる也。敵は四方よりかゝるとも、一方へおいまはす心也。敵かゝるくらい、前後を見わけて、先へすゝむものにはやくゆきあい、大きに目をつけて、敵打出すくらいを得て、右の太刀も左の太刀も、一度にふりちがへて、(行く太刀にて前の敵を切り、戻る太刀にて脇にすゝむ敵を切る心也。太刀を振違えて)、待つ事悪しし。はやく両脇のくらいにかまへ、敵の出でたる所を、つよくきりこみ、追つ崩して、其儘又敵の出でたる方へかゝり、ふりくづす心也。いかにもして、敵をひとへにうをつなぎにおいなす心にしかけて、敵のかさなると見へば、其儘間をすかさず、強くはらいこむべし。敵あいこむ所、ひたとおいまはしぬれば、はかのゆきがたし。又敵の出づるかたゝと思へば、待つ心ありて、はかゆきがたし。敵の拍子をうけて、くづるゝ所をしり、勝つ事也。折々あゝ手を余多よせ、おいこみつけて、其心を得れば、一人の敵も、二十の敵も、心安き事也。能く稽古して吟味有るべき也」とある。その「意味内容」は、次のようなことである。

*

*

まず、「多敵のくらい」ということであるが、それは、「……一人で大勢と戦う時のことである。わが太刀と脇差しとを抜いて、二刀を左右に広げ、二刀を横にした感じで構えるのである。そして、敵は四方からかかって来るとしても、一方へ追い回すように心がけること。敵がかかって来る状態や前後を見わけて、先にかかって来るものに素早く出て行って相手に会い、全体に目を配りながら、かかって来る相手の状態を心得て、右の太刀も左の太刀も、同時に振り違えて切り、(行く太刀にて前の敵を切り、戻る太刀にて脇に進む敵を切る心であるが)、太刀を振り違えて、敵を待つのはよくないので、早く両脇の構えに戻し、待つのではなく、敵の出で来るところへ強く切り込み、打ち崩し、つかさず、

また相手が出て来るところを斬りかかって、敵を打ち崩すのである。そして、何としても、まさに『敵を一行の魚つなぎになるように追いやる心』で仕かけて、敵がみだれて重なるらみたら、そのまま間をおかずに、強く敵を払い切っていくのである。そして、敵の込み合っている所を真っ正面から追いまわしても、(なかなか)はかがいかなないものであり、また、敵が出て来るところ出て来るところと思えば、待つ心(後手)になってしまい、(やはり)はかがいかなないものである。(それゆえ)、敵の拍子(状況)をよく見極めて、相手の『崩れる所』(つまり『崩れ目』)を知って(見抜いて)、そこを攻撃して、勝利を得るのである。そして、折々に、稽古相手を数多く集めては、追い込む練習をして、その『方法・要領』などを体得すれば、一人の敵も、十人、二十人の敵も、容易に(安心して)戦えるようになるのである。よくよく稽古して吟味あるべき」ことである。

*

*

さて、この一人で大勢と戦う時に最も大事なことは、それは、まず、「……敵は四方よりかゝるとも、一方へおいまはす心」で戦うこと。それは、相手の攻撃を待つのではなく、自ら積極的に攻撃していくこと。——例えば、いわゆる「魚群」(小さな魚の群れ)を積極的に追い回しながら、その「素早い動き」で獲物を次から次へと自在と捕らえていく一匹の「巨大魚」のように、敵(の群れ)を一方へと積極的に追い回しながら、まさに「二刀」を自由自在に使いこなして相手を倒していく、そういう一人の「狩人」(ハンター)になれということである。そして、さらに大事なことは、いわゆる「……敵を一行の魚つなぎになるように追いやること」であり、そうすれば、まさに「一対一」の対戦に持ち込むことができるとともに、「二対一」の対戦ならば、負けることはないのである。

しかも、それは、決して一か所に留まって戦うのではなく、一方で戦って斬ったら、すぐさま違った方向へ行つて戦い斬る。それは、まさに「つづら折り」(つまり「ジグザグ」)に素早く動き回って戦えということである。——例えば、四方を囲まれたならば、まず、一か所に襲いかかって突破口を開き、そこから全速で走り出しては、追つて来る敵がばらけて一人一人になったならば、それに襲いかかって何人かを斬り、すぐさま違う方向へと動き回って、敵がばらけた所をまた襲いかかって何人かを斬る。そのようにジグザグに素早く動き回っては、大勢の敵と戦えということである。

一、打あいの利の事

さて、「打あいの利」ということであるが、それは、「……此うちあいの利といふ事にて、兵法、太刀にての勝利をわかまゆる所也。こまやかに書きしるすにあらす。能く稽古ありて、勝つ所をしるべきもの也。大形兵法の誠の道を頭はす太刀也。口伝」とある。

*

*

まず、「打あいの利」ということであるが、それは、次のようなことである。つまり、それは、「……この打あいの利ということによって、兵法、太刀にての勝つ『利』をわかまえる(心得る)ということではあるが、ただ、このことは、細やかに書き記すようなことではなく、よく稽古をして、わが身を以て、直接、勝つ所を知るべきものである。大方は、兵法の『誠の道』を頭わす太刀である。口伝」とある。これは、具体的には、次のようなことではないかと思う。

* * *

まず、「敵」(相手)に「勝つ方法」としては、大別をすれば、次の「二つ」しかない。一つは、まさに「一撃必殺」であり、一撃で相手を倒すことである。そして、もう一つは、何度か相手と剣を交えた末に、相手に勝つということである。そして、この「打ち合いの利」というのは、まさに「後者」であり、それは、相手と何度か剣を交えて戦っている間に、一体、どうすれば相手に勝てるのか、その相手に勝つための「利」(理)を、まさに何年も何年も鍛練を積み重ねては、わが身を以て「体得しろ」ということである。

例えば、テニスであれば、最初の強烈な「サーブ」で勝負を一気に決めてしまう。これが、まさに「一撃必殺」の勝ち方である。そして、もう一つは、相手と何度かラリーを繰り返している間に、相手に勝つ「利」を見つけ出して、それで勝つということである。その場合、ふつう、相手がボールをいちばん「拾いにくい所」へと打っていくわけであるが、それには、大きく分けて、次の「三つの方法」があり、一つは、ストレートに打つ。一つは、クロスに打つ。そして、もう一つは、フェイントをかける。もちろん、強く打つ、弱く打つ、また、速く打つ、遅く打つ、そして、前方に打つ。後方に打つ、ラインぎりぎりに打つ。変化球、その他、それらはもうその時々の相手の「守備位置や動き」などに応じて、刻々と臨機応変に柔軟に対応していくものである。その勝つための「利」(理)を、まさに「わきまえろ」(つまり「体得しろ」と言っているのである。そのためには、「……よく稽古をして、勝つ所を知るべきである」ということである。

それは、宮本武蔵の「兵法の拍子の事」という項目の中でも、次のように語っているのである。つまり、「……大小・遅速の拍子の中にも、あたる拍子をしり、間の拍子をしり、背く拍子をする事、兵法の専也。此そむく拍子わきまへ得ずしては、兵法たしかならざる事也」とある。つまり、「……あたる(打つ)拍子を知り、間(間合い)の拍子を知り、そして、背く拍子(相手の拍子を崩す拍子)を知ることが、何よりも大事なことである。特に、この『背く拍子』(相手の拍子を崩す拍子)を知り得ずしては、その『兵法』(剣術)は、(決して)確かなものだとは言えない」ものである。そして、実践では、その敵その敵の拍子をよく知り、そして、「……敵山と思はゞ海としかけ、海と思はゞ山としかくる心、兵法の道」として、敵の思いも寄らない拍子を以て、敵の心を動揺させ、敵の身をふりまわして、まさに「勝つ利」(道理)を身を以てしつかりと「習得」(体得)しろということである。

ちなみに、宮本武蔵は、後述の「火之巻」で「かどかど」を攻めると言っているが、しかし、ここではそれをもう少し拡大して、例えば、相手の「最も強い所、最も得意とする所、最も自信を持っている所」を徹底的に叩け、という戦術もあり得るのである。——それは、相手の「最も強い所、最も得意とする所、最も自信を持っている所」を徹底的に叩いてしまえば、相手は「戦意喪失」となって、勝ったも同然となるのである。例えば、テニスであれば、相手が「絶対の自信」を持っている、一撃必殺の「サーブ」を打砕いてしまえば、相手は「戦意喪失」となり、勝ったも同然となるのである。このことは、よくよく「吟味すべき」ことである。

一、一つの打といふ事

次は、「一つの打」ということであるが、それは、「……此一つの打といふ心をもつて、儘たしかに勝つ所を得る事也。兵法能くまなばざれば、心得がたし、此義能く鍛錬すれば、兵法心の儘ままになつて、思ふ儘に勝つ道也。能々稽古すべし」とある。

まず、「一つの打」ということであるが、それは、「……この一つの打という心（方法）を以て、確実に勝つことができるのである。正しい兵法（剣術）をよく学ばなければ、体得し難いものである。この一つの打をよく鍛錬し身につければ、兵法（剣術）は、まさに心の儘ままになつて、思うがままに勝つことが出来るのである。よくよく稽古すべき」ことである。——これは、一太刀で、相手を「確実に倒す」ということである。その場合、相手の攻撃を待つて、相手を「一太刀で斬る」という、そういう「兵法」（剣術）は、宮本武蔵にはふつうはないのであり、宮本武蔵の「兵法」（剣術）というものは、常に（原則として）、先手必勝の「剣法」であり、ただ、それが具体的には、一体、どのような内容のものであるかは、ここには何も記されていないのである。

例えば、有名な佐々木小次郎との「巖流島の決闘」では、宮本武蔵は、佐々木小次郎を「一撃」（「一太刀」）で倒したと、養子の伊織が建てた「小倉碑文」にはそう書いてある。その時に、宮本武蔵が用いた「武器」というのは、伊織が建てた「碑文」では、「木戟・木刃」という文字になつている。例えば、映画やテレビドラマなどでは、一般に、舟の「櫂」を自ら削つて、それを「太刀」（刀）代わりに用いたことになつているかと思う。どちらにせよ、宮本武蔵は、自分の「太刀」（刀）は用いず、何か木でできた「道具」（武器）を用いて、対戦したことになる。ただ、気になるのは、「木戟」という言葉であり、これは、木でできた「戟」（ほこ）であり、長い「鏢」のようなものになる。しかし、実際の対戦の時には、「木刃」を用いて、佐々木小次郎を一撃を以て倒したとなつている。

宮本武蔵は、自分の「太刀」（刀）を用いていない。自分の「太刀」（刀）では、佐々木小次郎には勝てないと、はつきりと見切つていたからである。それは、一体、なぜなのか？ それは、相手の「内（懐）」に易々と入れるような相手ではない。相手の「内（懐）」に入つて、勝負できるような相手ではないからだ。恐らく、「内（懐）」に入る前に斬られてしまふだろう。それゆえ、相手に勝つためには、相手と同等ぐらいの「丈の太刀」が必要になつて来る。しかし、（映画やドラマの）佐々木小次郎の備前長光の「大業物」のような「長い太刀」は、なかなかないし、あつてもすぐには使いこなせない。そこで、宮本武蔵は、映画やドラマなどでは、舟の「櫂」を削つて、それで「木製の太刀」を創り出すわけである。それは、相手に「勝つため」であり、それ以外、何の理由もない。佐々木小次郎に「勝つ」ためには、自分の「太刀」に固執していたのでは勝てないのである。どうしても佐々木小次郎の「太刀」に匹敵するぐらいの「丈の太刀」が必要になつて来る。それが、まさに「木製の道具」になるのである。——ちなみに、「小倉碑文」の「本文」を一部抜粋してみると、それは、次のようなもの（内容）になつている。

爰に兵術の達人、岩流と名乗る有り。彼と雌雄を決せんことを求む。岩流云く、真剣を以て雌雄を決せんことを請ふ。武蔵対へて云く、汝は白刃を揮ひて其の妙を尽くせ。吾は木戟を掲げて此の秘を顕はさんと。堅く漆約を結ぶ。長門と豊前との際、海中に嶋有り。

舟嶋と謂ふ。両雄、同時に相会す。岩流、三尺（約九十センチ）の白刃を手にして来たり、命を顧みずして術を尽くす。武蔵、木刃の一撃を以て之を殺す。電光（これは佐々木小次郎のわざか？）も猶遅し。故に俗、舟嶋を改めて岩流嶋と謂ふ。

凡そ、十三より壮年迄、兵術勝負六十余場、一つも勝たざる無し。且つ定めて云く、敵の眉八字の間（眉間）を打たざれば勝ちを取らずと。毎に其の的を違はず。（宮本武蔵の剣は、それほど正確な剣であった）。古より兵術の雌雄を決する人、其の数を算するに幾千をかを知らず。然りと雖も、夷洛（日本）に於いて、（実に様々な）英雄豪傑の前に（立ち）向かひ、（その）人（たち）を打ち殺す。今古其の名を知らず。武蔵一人に属するのみ。兵術の威名、四夷（四方）に遍き、其の誉れや、古老の口に絶えず、今人の肝に銘じる所なり。誠に奇なるかな、妙なるかな。力量早雄、尤も他に異なれり。つまり、その力量「早雄」（荒々しく雄々しい所）は、尤も他の人たちとは違ふところである。

武蔵、常に言う、兵術を手に熟し、心に得て、一毫も私無ければ、則ち、戦場に於て恐れる事もなく、大軍を領する事も、又、国を治る事も、豈に難からんやと。（大軍を領する事も、又、国を治る事も、どうして難しいことがあるだろうか）（中略）

施に加えて、六芸である「礼（礼節）、楽（音楽）、射（弓術）、御（馬車を御すること）、書（文学）、数（算術）」の文に通ぜざる無し。況や小芸・巧業をや。殆ど為して為さざる無き者か（殆ど何でもこなした）。蓋し大丈夫の一体なり。（間違ひなく、大武人、大人物の一人なりとある。）——例えば、「地の巻」の後記である、心得「九項目」なども、すべて宮本武蔵の実際の様々な「体験・経験」などを踏まえての「生きた智慧」であり、それゆえ、単なる「絵空事の言葉」などとは全く違ふものなのである。

一、直通のくらいといふ事

最後は、「直通のくらい」ということであるが、それは、「……直通の心、二刀一流の道の道をうけて、伝ゆる所也。能々鍛錬して、此兵法に身をなす事肝要也。口伝」とある。

*

*

まず、「直通のくらい」ということであるが、それは、「……直通というのは、二刀一流の道の道を承けて、伝えるところであり、よくよく鍛錬して、この兵法に身をなす（身が兵法のように成る・兵法を体現するまでに成る）ことが肝要（大事）である」ということである。——その場合、一つは、「直通」を「二刀一流の極意」と解釈する場合であれば、宮本武蔵の「二刀一流の兵法（剣術）」を真に「習得・体得」でき得て、（初めて）極意の心を伝えるところであり、それゆえ、よくよく鍛錬して、この兵法に身をなす（身が兵法のように成る・兵法を体現するまでに成る）ことが肝要（大事）なことになるのである。そして、もう「一つの解釈」は、宮本武蔵の「二刀一流の兵法（剣術）」を真に「習得・体得」でき得ている人だけが、まさに宮本武蔵の「二刀一流の兵法（剣術）」を真に伝承でき得る資格のある人であり、そこまで達していない人たちには、その資格がないということであり、それがまさに「直通のくらい」であり、それゆえ、よくよく鍛錬して、この兵法に身をなす（身が兵法のように成る・兵法を体現するまでに成る）ことが肝要（大事）なことになるのである。どちらであれ、よくよく鍛錬して、この兵法に身をなす（身が兵法のように成る・兵法を体現するまでに成る）ことが肝要（何よりも大事）なことに

なるということである。

一、「水之巻」の後記

巻末は、「水の巻」の後記であるが、それは、「……右書付くる所、一流の劍術、大形此巻に記し置く事也。兵法、太刀を取りて、人に勝つ所を覚ゆるは、先づ五つのおもてを以て五方の構をしり、太刀の道を覚へて惣躰自由になり、心のきゝ出でて道の拍子をしり、おのれと太刀の手さへて、身も足も心の儘にほどけたる時に随ひ、一人にちかち、二人にちかち、兵法の善悪をしる程になり、此一書の内を、一ヶ条くゞと稽古して、敵とたゝかい、次第くゞに道の利を得て、不レ断心に懸け、いそぐ心なくして、折々手にふれては徳を覚へ、いづれの人とも打合ひ、其心をして、千里の道もひと足宛はこぶなり。緩々と思ひ、此法をおこなふ事、武士のやくなりと心得て、けふはきのふの我にちかち、あすは下手にちかち、後は上手に勝つとおもひ、此書物のごとくにして、少しもわきの道へ心のゆかざるやうに思ふべし。縦ひ何程の敵に打ちかちても、ならいに背く事におゐては、実の道にあるべからず。此利心にうかびては、一身を以て数十人にも勝つ心のわきまへあるべし。然る上は、劍術の智力にて、大分一分の兵法をも得道すべし。千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす。能々吟味有るべきもの也」とある。

正保二年五月十二日

寺尾孫丞殿

新免武蔵

さて、「水の巻」の後記の文章であるが、その「意味内容」は、次のようなものである。まず、「……右に書き付けたるは、わが二天一流の劍術、大方この巻に書き置くもの」である。その兵法（劍術）、太刀を取って、人に勝つことを学ぶには、まず、「五つのおもて」（その基本）によって「五つの構え」を学び知り、また、「太刀の道」（その太刀筋）を習い覚えては、全身は自由（柔軟）になり、また、心も鋭利なつて来て、道の拍子を知り、自然と太刀の手も冴えて、身も足も心のままにほどこけるようになるに連れて、一人に勝ち、二人に勝ち、兵法の「善悪」（道理）を知るほどになり、この一書（水の巻）の内容を一ヶ条くゞと日々稽古をし、また、実際に敵とも戦い、其等の「積み重ね」によって、次第次第に「道の利」（実利）をわが身で体得し、絶えずその兵法（劍術）を心にかけて、急ぐ気持ちはなくし、その折々手に触れては、兵法（劍術）の「徳」（優れた力）を覚え、誰とでも打ち合い、様々な「人の心」の有り様を知って、千里の道も一歩ずつ進むのである。そして、ゆったりと長い目でみて、この法（兵法）を行なうことは、武士の役目であると思つて、今日は、昨日の自分に勝ち、明日は、自分より下手に勝ち、後は、上手にも勝つと思つて、この書物の内容通りに従つて、少しもわき道へ心の行かないように心得るべきである。たとえどれほどの敵に打ち勝つても、正しい「習い」（教え）に背くようであれば、真の「兵法の道」とはならないものである。この「道の利」を心に浮かべては、一人で数十人にも勝つ心（方法）をわきまえるべきである。その上で、その兵法（劍術）の「智力」（智慧）を以て、大分一分の「兵法」、ここでの意味は、まず、一対一の兵法（劍術）を習い覚え、次に、多数対多数の合戦の兵法をもしつかりと「得道」（道を極め

慮(る) べきである。「……千日の稽古を鍛(たん)とし、万日の稽古を錬(れん)とする」。よくよく吟味(熟慮)あるべきことである。

正保二年五月十二日

寺尾孫丞殿

新免武蔵

あながき

例えば、この宮本武蔵の『五輪書』という著作は、どちらかと言えば、初心者用に書かれた教本であるという一つの見方があるかと思うが、しかし、宮本武蔵の「兵法」(剣術)には、もともと「入口も出口も表も裏も奥義もその他」、そのような一般的な「考え方」はないのであり、それは、まさに「直線的な考え方」であり、例えば、それを「鉄道」で言えば、それは、まさに「大阪から東京までの一方通行」の「直線的思考」である。

一方、宮本武蔵の「考え方」は、それとは全く違って、それを遙かに超越した「考え方」であり、例えば、それを「鉄道」で言えば、それは、まさに「山手線」であり、その「考え方」は、直線ではなく、むしろ「円循環的な考え方」であり、すべての駅がすべて同じように「入口であり出口であり表であり裏であり奥義でも」あるとともに、それら一つの「項目」が、まさにすべて同じように大事なことになるのである。

例えば、「……最も基礎的なことが、実は、最も究極的なことでもある」という「考え方」である。それは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、例えば、「太刀の持ち方」一つ間違えただけでも、その人は、もうそれだけで永遠に「剣の達人」にはなれないということである。もちろん、ある段階までは行くことはでき得ても、それ以上の、つまり、その道を真に極めることはでき得ないのである。

例えば、この後記の「本文」のなかにも、「……この書物の内容通りに従って、少しもわき道へ心の行かないように心得るべきである。たとえどれほどの敵に打ち勝っても、正しい『教え』に背くようであれば、誠の『兵法の道』とはならないのである」とある。そして、有名な「……師は針、弟子は糸となつて、たへず稽古有るべき事也」とある。

それは、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。まず、「針」というのは、最初、(まるで見本を示すように)、必ず、「生地」の上(下)をなめらかに縫い進んで行くものである。一方、「糸」というのは、その縫い進んでいく「針」の後を、まるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じように縫い進んで行くことになる。——そのように「糸」(弟子)は、「針」(師)の後(やり方)をまるでそのままそっくりなぞるように、或いは、まるでそのままそっくりまねるように、全く同じように後を追っていく。

最初の「基礎」というものは、そのように絶えず稽古をし、そして、その基礎の上に、初めて、その人なりの「応用」(個性)というものが真に発揮でき得るようになるのである。このことは、よくよく吟味(熟慮)あるべきことである。

③「火之巻」へと続く……。

平成二十九年七月吉日 (改訂版)

如月翔悟

「参考文献」

- ※底本「五輪書」(渡辺一郎校注)(「岩波文庫」)
- ※底本「五輪書」(佐藤正英校注)(「ちくま学芸文庫」)
- ※底本「五輪書」(兼田茂雄校注)(「講談社学術文庫」)
- ※底本「武蔵の五輪書を読む」(ウエブ参照)